

---

# 異世界っぽいもの（仮）

未飼育

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界っぽいもの（仮）

### 【Zコード】

N4718W

### 【作者名】

未飼育

### 【あらすじ】

ネトゲっぽいものから月日流れで幾年か、いつものメンツが久々にカラオケなどをした帰りに・・・的な、お話。

見覚えあるような無いような変な場所に放り出されて、さあ大変。ひとまず酒飲んで、道端の草でも詰みつつ行きましょうか大麻発見・・・というような、変わったこと一つない極平凡な日常を描く愛と感動の（存在し得ない）誰得話、開始。

「最近痴口リンが呼吸するのと同じ頻度で腐臭を撒き散らすんだが  
どうしよつ？」

「よし、埋めようか」

「で、対抗してこちらはセクハラトークを繰り出してな？」

「うん、刺した（過去形）」

「「「ボオ」

今日も、平和ですね。

気づけばそれは懐かしく（前書き）

フライング気味に導入投稿。  
ネトゲの方と並列で書いていく、かもしませぬ。

## 気づけばそれは懐かしく

友人達とのサバト染みたカラオケが終わり、部屋を出て精算に向かう途中のエレベータ内において。

ふつと一瞬、明かりが消えた。

「停電？」などの声が聞こえるが、それも一瞬。こういう時は階ボタンの下にあるマイクで連絡するんだつけ等と考えていた自分が、再び明るくなつた周囲に愕然とするのも、また一瞬。

友人達は、消えていた。

更に言うなら、エレベータ内ですら、なかつた。

「なんだ、これ・・・」

聞き覚えはあるが自分のものではない声を搾り出す。  
光源らしきものが見当たらないのに、やけに明るく感じじる、密室。  
目の前には、扉一つ。

左右、後ろ、上下に、退路無し。

さあ、ススメ！ と言わんばかりである。

正直、行きたくないんですが。

しかしこの状況じや、夢と思つて寝てみるか、扉を開けてみるか・・・

・もしくは。

「りれみとー！」

ダメでした。

ちなみにルーラもダメでした。

夢のない夢だこと・・・では、気を取り直して。

扉のノブに、指が触れる。

パリッと、痛みのない程度の静電気が走る。

反射的にイテツと言つてしまつのは、お約束といつことで。  
離れてしまつた指を再びノブに巻きつかせ。

くるりと回して扉を開き、一步前進こんにまはつ！

扉をくぐつたその先に待つてゐるものは。

フリーフォール、自由落下といつやつでした。

着水まで数秒、湿つて張り付く衣服が愉快に体を拘束する。  
なんとか体が浮くように、とだけ心がけ、必至に咳き込んで肺から  
水を追い出して。

嗚呼、川の流れのように・・・といふか、普通に川流れしてなんとかへばり付いた岸でグツタリしてゐる自分がいる。  
ただ、自分と言つても見覚えのある手足でなく。

見覚えのある服装でなく。

声も、持ち物も、まるで見知らぬ別人のもの。  
・・・ん、少しだけ、違和感。

見覚え、は、ある氣がする。

どこでだつたか、いつだつたか、それなりに長い付き合ひだつた気が  
が、する・・・。  
しかしまあ待てまづすべき事がある。

「服、絞ろう」

ありがたい事に、寒さは感じない。  
むしろ、蒸し暑さを感じる程度の暖かさだ。

日当たりの良い岩に濡れた衣類を貼りつけて、自分もついでに大の

字に。

しかし赤裸とは、「イツわかつてやがるな、と、仮住まいの体を褒めてみたりもする。

しばし体を乾かし、ようやく人心地ついて胡座をかく。

ようやく、周囲を見回す余裕が出来た。

と言つても、川と、それを囲む岩壁しかないのですが・・・木すら見当たらない。

うわあ、乾かしておいてなんだけど、また濡れて下流に行くはめになりそう・・・等と思つていると。

岩に張り付かせていた衣類から今にもこぼれ落ちようとしている謎の小袋。

慌ててそれの逃亡を阻止、ついでに中身を拝見してみる。

巾着状の口を開いて、覗き込んだその先は。

なんだこれ。

袋の中身が、理解できるけど視認できない。

何を言つているかわからないだらうけど、一言で表すならソレである。

中身が見えているわけでないのに、中に何が入つていてそれを取り出すことは出来る・・・。

本当に、何だこれ。

でもひとまず、なにか適当に出してみる。

巾着袋に手をつっこんで。

それを、引っこ抜いた。

曲がった棒。

木刀の小太刀くらいの、曲がった棒。

さらには、切つ先に握りこぶし大の塊が。

材質、分からん、なんぞこれ。

重量、軽い、中身中空なのかね？

硬さ、シャフト部分はしなやかな木製を彷彿とさせる質感弾力、切つ先の塊はエッジの効いた硬質感。

メイスみたいな感じがしたので、とりあえずそいつらの筋を殴つてみる。

ミチツ。

謎の手応えと共に、先端の塊が染みこむようにメリ込んだ。

「え、弾かれない？ 普通

かなり愉快に食い込んだそれを、苦もなく引きぬく鍛えられた筋力。うおお、鍛えてるなー外の人つ、と、仮住まいの体を超賞賛。この体じゃなかったら、案外川で溺れて死んでいたんじゃなかろうか。

つと、そうだこの棒の方は傷ついてないかなー、と、何気なく先端部を撫で付けた、その瞬間。

〈繭：起動しますか？〉

眼球に直接投射される、確認メッセージ。

謎の棒、その先端に真っ赤な切れ込みが入り、くぱあ・・・と左右に剥けていく外郭と、現れる操作パネル。

「あ

唐突に思い出される、記憶。

懐かしい、昔。

もう5年ほど前になるのか。

先程までカラオケしていた友人達と遊んだ、ネットワークゲーム。

そのひとつに、確かこんなものも、あつた。

サービスが唐突に終わらなければ、きっと続けていたであろう、あのゲームだ。

ああ、懐かしい。

幾度と無く戦闘をくぐり抜けてきた、叩き上げの体。

なんのドラマもなく普通に手に入れていた、無限袋。

赤フン作って貰つたのは、確か灰色の彼だつたか。

あはは、そうだそうだ、ああ、もう、懐かしいなあ！

自分は「操縦桿」の操作パネルをメイス状の待機状態に戻すと、それを無限袋につつこんで、生乾きの衣類を手早く身に纏う。

そして「永久化している魔法を解放した」。

軽くステップをふむが如くに、空を翔ける自分の体。

ああ、風を感じて空を飛ぶつて、こんな感じだつたのか。

あれ、でもあのゲームじゃ風圧なんかは無視出来るはずだつたよね？  
小首をかしげつつ、かなりの高空まで飛翔した自分。

今しがたまで甲羅干しでお世話になつた川が、いまや眼下のシミの一本となり。

周囲グルリと見回して、ひとまず疑問も投げ捨てて。  
さあ叫べ、変身だ！

「<変身> - <悪魔> つ」

「ほん、きゅつ ほん！」

「ああ、満足だ・・・実に、満足だ・・・。

「そついやあのゲームじゃ下着姿にまでしかなれなかつたけど・・・  
これだけリアルな質感なら、ぶつちやけ脱げね？」

即実験。

脱げた。

結構どうでもいいことだが、テンションが上がる自分がいた。



## 歩けば歩けば古の

無限袋から昔懐かしの装備を引きずりだし身に纏う。一品一品に思い入れがあり、一つ一つ身につける度、気味悪くにやけてしまつ。

ああ、コイツはこんな感触なんだ。

ああ、コイツのおかげで何度も助かつたけ・・・重たつ。ひとまず腰に、武器といえば武器で防具で、兵器といえばその正体は・・・な、仮称刀槌を佩ぐ。

現状確認、空氣があり水があり、食料はそこら辺にいた小動物を捕まえて調理した。

スキル的にはそれなりのものを持っていたけど中の人達が違うからどうにもならないかなーとか思っていたのだが、驚いたことに。

まさに体が覚えている、というレベルで。

血を抜き皮を剥ぎ筋を切つて、サクッとドジョウやらえが出来てしまつた。

中人のスキルでは、こうは行かない。

地味に全スキル自分限界を自指した外の人、恐るべし。

「「いやそれさまでした、ゲフー」

貴様を喰らつて自分は生きる、と誓いを新たに小動物の残骸を土に埋め。

ひとまずのんびり歩いてみようか、と、自分は適当な方向に歩き出した。

山育ちだから山の方向よりは地平線ーとか水平線ーって感じの方向に行きたいねー、等と独り言を言いつつ。

ひとまず寝床でも探さねば、と、欠伸をしながら考える。

適当に歩けば何がしか現れないかなあ、と、淡い期待を込めての徒歩旅であったが、全くの空振り。

延々と続く草原に、夕日は既に落ち。

何気に轍のようなの続く道らしきものがあつたので、それを延々と歩き続けたわけであるが。

「未知の道にい　一人　　つて感じだねえ」

そのまんまじやねえか、と、仲間がいたら突っ込んでくれただろうか。

そんな他愛ないことを考えつつ。

空には星、月、地には薄闇。

聞こえてくるは虫の音、狼の遠吠え、蹄の音。  
ん、蹄？

ぐるりと蹄の音の方向、後ろを振り向き耳を澄ます。  
そして肌で周囲を見るよつに気配視覚の瞼を開く。

刀槍を右手に、臨戦態勢完成。

く永久化>してゐるもの開放は、どうしたものかな。  
結界系だけで、いいか・・・生きるの優先、いのちをだいじに。  
つてか、空飛んで様子見でもいい気がするけど・・・もう見つかつてるっぽいのでこの理由の分からぬ現状初の話が通じるエンカウントでありますようにと期待を込めて、待つ。  
遠田で分かりづらいやが、気配視覚は見逃さず。

一騎の、騎馬。

装備は軽装、何がしかの伝令兵、といった感である。

接触まで、あと数秒。

普通に通り過ぎる可能性も考え、道の横に避けて待つ。  
はたして。

「旅の方か、こんな場所に徒步で一人か？」

急ぎつぽかつた馬の足をわざわざ止めてこちうに話しかけてくる軽装騎馬兵（不確定名）。

日本語ではない言語、外の人は言つてゐる、コレは共通語だ、といよつし、話が通じる出会いゲット。

このままなし崩し的に貴様のハラワタを食らつて・・・去れ魔王。

「はい、仲間とはぐれまして。轍のある道があつたので、氣長に歩けば村もあるか、と歩いていました」

ひとまず端的に説明を試みる。

腰は低く、腰は低く・・・顔が無表情にならなにように、少しだけにこやかに。

そう心のなかで唱えつつ、軽装さんの返答を待つ。

「それは大変だな。ここからだと、次の村まで早足で行つても半日はかかるぞ？」

本氣で心配そうに言つてくれてゐる軽装さんに好感度アップな自分がいる。

半日か一、時速五キロで1-2時間として・・・飛んで1時間掛からないね無問題。

「うわあ、半日ですか。でも野営準備も面倒になつてきただので徹夜でのんびり散歩とと思って歩きます」

わざわざお急ぎの足を止めてまで教えていただいてありがとひびきています、と、深々頭を下げる。

「ああ、まあ、旅の方がそれならそれでいいのだが。よかつたら、

後ろに乗つて行くかね？」

とても呆れられた声色でございました、まる

つてか、この人こんな不得体のしれない一人旅の男を乗つけて行つて

くれるつもりだった、だと・・・?

いけない、こんないい人には自分に関わった挙句に変な方向から死亡フラグとか立ちかねない状況をプレゼントしてはいけない。

「お気持ちだけいただきます、ありがとうございました。 そういうえば、お急ぎのご様子でしたが、行かれなくても平気でしょうか?」  
ぬるりと先を変えてみるぜ・・・さあ、どう来る・・・。

「うむ、そうだった。 見ての通り急ぎであった。 共に行かぬのなら私はこれにて失礼する。 このあるあたりはさほど魔物なども湧かぬが、道中気をつけて」

早口に言い切ると、軽装さんは颯爽と馬の脇腹に蹴りくれて走り去つていった。

そういうふうな場面見ると毎回思うが、拍車とかつけた靴で馬蹴りつけるつて、当人・・・当馬からしたらどんな気持ちなんだろうね。

別にあんなん無くても合図くらいで走ってくれないかね、訓練してれば・・・。

と、話がそれた。

さて、こうして情報は手に入り、人もいる事がわかり、言語はゲームの共通語と来たもんだ。

えーっと、シンプルに行くなら、ゲームの中とかいう流れでしおかこれ。

次点で、やけにリアルでしつこい夢。

もしくは・・・酷似した、別の、世界とか・・・?

実は中の人の記憶そのものが作り物と言つ線もあり・・・か・・・?  
数秒考えたが、答えなど出るわけも無し。

そもそも、どれが正解でも、結局は食つて寝て生きて行く方向しかない。

ん、自殺してみる?

いやいや、人間誰しも必ず1回死ねるんだから、別に慌てなくてもいいもんじゃよ。

早くそのワイルドカード切ったといひで、自分自身が無くなるのが早いか遅いかの違いだけじゃないか。  
さて、それではとりあえず。

「のんびり、歩こうか・・・いきなり飛んでの人より早く着いてたら何を言われるか分かつたもんじゃないしのう」  
自分は静かに暮らしたい。

ひとまず人間の生活圏についたら酒屋でもやつてのんびり暮らそう。  
そして金を貯めて・・・旅して、みようか・・・。  
万が一友人達も同様の状態だとしたら・・・探さにや、ならんしなあ。

そういうや、袋の中に、金あるんじゃ・・・。  
金一、金一、と、念じて無限袋を逆さに振つてみる。  
ペチン、と、地面に銀貨が三枚落っこちた。  
以上。

赤貧でした。

あ。

夜の散歩も楽しいもので。

ひとまず貧しさに頭が醒めたので、道すがら外の人技能の薬草知識などを動員して文字通りの道草を食いつつのんびりと歩を進める。  
無限袋の弱点、生物入れると即死するという点から生薬関連をぶち込むのは躊躇われるため、両手に草の束を握りしめて夜道を徘徊する一人旅の男が完成。

気付けにと袋の中の大量備蓄酒を飲み始めたりしたものだから、既にすごいへべれけに進化。

「おおつと、いけない草を発見ー。ゲットだぜ！」

具体的に言つと大麻。

「力の葉つぱもあるよ！」

ケシの実を忘れてはいけないな、BOY?  
ひやつふー、ひよつとしてここが天国？

「つてなんで麻薬煙やねんー！」

即時廃棄。

恐るべし知らない土地の道端雑草。

いつきに酔いが醒めたわどうしてくれる・・・。

そんな感じで夜の散歩を満喫していたため、愉快に時間が経過。  
既に空の端が薄明かりを帯びてきている。

結構麻薬刈りで時間を食つてしまつたか・・・こんな事ならもう少し早く飛んでおくべきだったか。  
仕方なし。

飛んでるの見つかって目立たくもないの。  
このまま歩け、歩け、歩けー、と歌いつつ両手の薬草をブンブン振  
つて道の真中を暴歩する。  
時給は12ガメルくらい。

襲い来る眠気に対抗するため半ばヤケで適当な歌を歌い、思い出しだように道草を摘んで歩き。

そこを発見したのは、太陽も空の半ばに登りつか、といった時間のことだった。

苔むした石作りの住居・・・の、残骸。

記憶にある姿からはまるで似つかぬアフターがそこにある。  
道から外れた小高い丘の、見覚えあるその頂きに。

自身が日常大工でコツコツ建てた石造りの家が、あつた。

うわあゲーム内、確定・・・か？

## 混じればそれは穏やかな

いつものメンツハウスの悲しいアフターに打ちひしがれつつ、自分はひとまず元・1階丸テーブルの下・・・辺りを搜索する。かなりしつかりと作つておいたはずなので、それなりの年月は耐えていると信じたい・・・。

くくく、実はこの家の地下に秘密の居住空間が眠つてゐるとは仲間たちも知るまいて・・・！

まあ、ぶっちゃけ家の材料取りに石掘つた採掘坑なんですがね？

ざり、ざり、と風雨に溶かされた泥や砂の層を削り、床石が顔を見せるまで作業を繰り返す。

ようやく出てきたそれは、テーブルを固定していた金属部品が綺麗に錆びきり朽ち果てて固定穴が虚ろに開く眼窓のよつになつた穴あき石板。

テーブルが健在なら、テーブルごと床板が開いて隠し扉が出てくる設計だつたのに・・・。

引っ剥がすのが面倒になつたので床板を刀鎌で叩いて砕く。粘土板でも崩すようにそれを砂のよう粉碎すると、そこに見えるは木製の跳ね上げ式床扉。さすがの無傷。

伊達に魔法で施錠してないぜ！

・・・<施錠>魔法に、腐食防止やらの機能がついて、よかつた。

・・・

<灯火>にて視野を確保しつつ、地下へ降りる。

ヒヤリとする空気と、舞う砂埃。

ああ、どれだけ時間が経つたんだろうね、ここは。

正直、ゲーム終了からの5年程度じゃここまではならない・・・と、

素人考案で思えるほど、メンツハウスや地下の状況は、荒んでいる  
ように思つ。

時間の流れが違うの、か？

もしそうなら、そして、自分の本当にいるべき場所の時間が緩やか  
に過ぎてくれるのなら。

有り難いかな、と、少し思つ。

扉の表面を「偽装」魔法で誤魔化す。

そして、ひとまずの拠点となる地下部分の居住性を高める行動に出  
たいと思う。ソロで、  
なにせ銀貨二枚が全財産の現状である、ぶっちゃけると、宿代もで  
ねえ。

それより何より、今は徹夜明けなので、とてもとても眠いのである。  
採掘坑は階段状に斜め下方向に掘り進め、頃合いを見て横坑道を掘  
つていく方式で作業していた昔の自分を思い出し、周囲を確認。  
穴だらけ。

うわーい、頑張りすぎじゃね、昔の自分。

確かこっちに休憩所作った気が・・・と、曖昧な記憶を便りに歩き  
出す。

歩くこと数分、メンツハウスの建つてゐる丘の中程くらいまで地下  
を掘り進んだ地点。

朽ち果てる事無く、ただホコリをかぶった木のドアが、自分を出  
迎えてくれた。

ホコリを吹き散らしてノブを回し、休憩部屋の中へに入る。  
アラこんなところに井戸掘ったかしら？

ああ、そういうえばいきなり水源掘り当てたんで、慌てて井戸形状に  
でっしゃ上げたんだったつけ・・・。

ひとまず井戸水を飲んでみる・・・うまい。

よかつた、ひとまずこれで川の水とか飲まなくて済みそうだ。

後は寝床寝床・・・あ、そういえばここに来た最後の日に干したまんまだつたつけ・・・風雨に消えたか。仕方なく無限袋から寝袋を取り出すと、スポーツと包まり即時就寝。おやすみなさいませ・・・。

不意に、目が覚める。  
睡眠が足りた証拠か、雲がかつていた意識の混濁が綺麗に取れていった。

「さて、まだ表が明るいといいのだけど」  
ひとまずここにメンツハウスがあるといつことは。  
あと少し歩けば、皆の拠点、愉快空中庭園完備のアルカディア。  
クラフター達が自重しなかつた結果の產物。  
'塔'が、あるはず。

幸いにも、丘の上に登り切った時点で夕日と言えない程度の日の落ち様。  
自分はのんびりと丘を降りると、轍残る平地道を鼻歌交じりに進んだ。  
そして。

自分の目の前に広がる、記憶にない村。  
その奥、よく覚えている'塔'のあつた場所には。  
世界樹、とでも呼びたくなるような。  
'塔'を飲み込んだであろう、大小様々な樹木が一本の樹として成り立つ異様が、そそり立っていたのだった。

「絶対に、5年じゃいられない

100、200、いや、もつとか。  
ここがゲームの中だとするならば。

この中の時間は、果てしなく速い流れで、進んでいるのか・・・。

「世界樹」を馬鹿みたいに仰ぎ見る。

木々の端から除く「塔」の石壁が、若干のひび割れのみで健在そうに見えるのだけが、自分の心を若干和ませた。

ひとまず、自分は見覚えのない村・・・「世界樹前」とでも呼ぼうか、に、たどり着いた。

畠仕事から早々に引き上げる農夫に軽く頭を下げながら村の中まで同道させてもらつ。

「やあ旅人さんかい？ アンタもウチの自慢の樹を見に来たのかい？」

ここらじや 一番の観光名所だからなあ、と、気のいい農夫が笑いかけてくる。

「噂以上に凄い代物ですね。自分は仲間と一緒にアレを見に来たんですけど・・・その仲間と途中ではぐれてしまつて。こちらの村にここ数日内に訪れて滞在している旅人とかはいらっしゃいますか？」

作ったヤツらを知っている、とは言わずに、ひとまず褒めから入つてみる。

「ここんところは旅人もすっかり減つたしなあ、一時期に比べて宿屋も減つちまつたし、風漬しに探してみるくらいしかないんじやないかなあ」

ワシは朝から夕方まで道から外れたところにある畠で仕事なんで旅人さんが来たかどうかは分からんんだわ、と、済まなそうに頭をかく農夫。

「いえいえ、もし！」存知でしたら、位の気持ちだったのでお気になさらぬで下さい。 ひとまずオススメに従つて宿を回つてみります」

ありがとうございました、と、にこやかに手を振つて家路につく農夫と別れる。

さて、一人目のHンカウントも予想外に善良そうな人だったな・・・などと考えながら、ひとまずそれほど広くもない村の多くはない宿屋を探して徘徊することに。

全三軒の宿をめぐる。

残念ながら、友人達はおろか中の人に入つていそうな顔見知りも居らず。

受付の人に「泊まつて行くなら安くしておくれ」と言われ「あ、お金ないんです」と切り返す居たたまれなさを三度味わつて、収穫なし。

いや、ひとまず今はまだ友人知人がいない、という情報を得た、か。しばらくは、こここの村を拠点に・・・待つてみるとしようか。

徒に動きまわるよりは、きっと合流できる公算は高くなるだらう。

友人達が、本当に自分と同じようにこの世界上にいるなら、という条件が重く心に伸し掛りはするが。

ひとまず、村長さんの家をそこら辺の住民を捕まえて聞いてみると。

観光名所のくせに旅人が珍しいのか、面白そうにこちらを見てくるオバさんに愛想よく笑みを返し、得たい情報を得る。

なんのことはない、このオバさんの旦那さんが、村長であった。

サクッと晩酌中の村長さんを直撃し、ひとまずこの村をしばしの拠点にしたい、と申し出る。

仕事などがあるなら、なお嬉しいです、と言え、出来ることを云える・・・全体の、一割くらい。

力仕事に鍛冶仕事、料理洗濯荒事から応急手当・・・位は伝えたか。全部伝えたら、絶対胡散臭い目で見られると言ひ自覚はある。特殊技能を除き、全部自分限界まで鍛えた自称「まるまり」は、伊達ではないのだ・・・。

「最近の旅人さんはなんでも出来るんだねえ」

村長さんの社交辞令に照れてみせたりしつつ、一応の了承を得ることに成功。

今のところ無一文なので、村近くの丘にある廃屋辺りにてント暮らしそしています、とだけ伝え、村長家を後にします。

ここのところ寒くなつてきているから風邪を引かないようになあ、と見送られ。

かくして、自分の拠点に、帰つて参りました。

友人知人はまだ見ぬけれど。

素朴な村人たちに囲まれて、のんびりと長閑に。

わずかながらの、穏やかな時間が、流れた。

思えばそれは違和感で

「世界樹前」到着から数日が経った。

メンツハウス地下の洞穴を住処として、時には村人の雑事を手伝い、時には無限袋の備蓄酒を売り払い、時には柵を破って進入してきた暴れ熊や暴れイノシシを撲殺したりした。

ああ、実に穏やか・・・そりいえば全然魔物の姿、見ないなあ。野生動物は偶に遭遇して貴重な動物性タンパク質になつていただいているのだけれど。

そうそう、クエスト受けたり個人取り引きしたりと地味にゲームで大活躍だつた掲示板が、存在しなかつた。

ちょっとここがゲーム内だという仮説が揺らいだ・・・のかな?

良く似た世界説が最有力に躍り出た。

自分の適当な脳味噌じや、結局結論は出ないので。

ひとまず。

今を、生きることにする。

ひなびた村ではさほどの酒需要も見込めず（消費量が日に30リットルほども行けばいいほう、だそうで、現状の仕入れで充分すぎるとのこと）、喰うに困つたら換金してもらう程度でいいかなあ、という現状。

仕方なくその他生活必需品作成や村周囲の柵の補強改造を行う自分工務店開業。

村に魔法を使う人を見かけないため、何となく技術だけで色々やつてみている。

嬉しいことに周囲の鉱山は記憶と違わぬ位置にあり、かつ村人は知らなかつたらしく手つかずで残つていた。

これにより金属の自給自足が可能となつた。

鍋鎌鍬包丁……と、鉄製品を作成してお金にしてみる。

特に刃物は刀の製法で鍛造したので折れず曲がらずよく切れ、それなりに良い値段で引き取つてもらえた。

・・・仕事場を借りた、鍛冶屋さんに。

「そういえば、魔物の姿をまるで見かけませんけど、この辺りは討伐隊でも組んで魔物狩りでもしたばかりですか？」  
技術を見込まれて鍛冶屋さんにてアルバイト中。  
自分は何の気なしに鍛冶屋の親方に尋ねる。

「お？　えーとな、ああ、お前さんが来る前日の夜とかに何匹か現れて、ちょうど巡回してきた兵隊さんにおっぱらわれてたな」  
真っ黒になつた手ぬぐいでスコールに突つ込んだような有様の汗をふき取りつつ答えてくる親方。

兵隊さんつていうと、ファーストコンタクトのあの人か・・・単騎で複数相手取つたんだ、やるねつ。

「へえ、すごいですね那人。　お会いしてみたかったなあ」  
額に巻いた手ぬぐいを絞り、鉄分満点の土に水気をプレゼントしつつこう自分に、親方が笑う。

「ははっ、会つてどうするんだい？　喧嘩でもふつかけるのかい？」  
んなわけないかー、と自分の言葉にツツコミを入れて親方は唇にしようやー、と、店を出て向かいの食堂に歩き出す。

「お話を聞きたかっただけですよ、なにか忘れてる気がして  
はい、すぐ行くんで日替わり頼んでおいてくださいー。　と、大声  
出してみるが聞こえてるかどうか。  
普段から鉄叩く音に耳を痛めているせいで、親方結構耳遠いんだよ  
ね。

・・・後でマッサージと称して魔法で治してみるかね。

働いた働いた、と、自分は村外れに建てた竹衝立の向こうへ。

先日大量に薪を作つて積んでおいたので燃料には困らず。

煉瓦をモルタルで固めて作成された大浴槽・・・いや、それほど大きくないから中浴槽とでもすべきか。

その中へ、すぐ近くに掘つた井戸から水をポンプで汲み上げ（ポンプレシピ）買っておいて本当によかつた・・・）、薪で湯を沸かし。自分は衝立の入り口にのれんを掛けた。

#### 〈銭湯開始〉

ポツポツと家から仕事場から現れる、一仕事終えた村人達。入り口にあるバケツに銀貨を放り込み、続々と衝立の中へ消える。長く語つたが要は銭湯、である。

季節的にもまだ暑く、昼間の汗は不愉快で。ひとまずイメージ的に100円程度の価値かな、と思つ銀貨一枚にて利用できる外湯を作つてみたのだ。

案外好評のようで、自分も嬉しい限り。

さて、では自分も一風呂浴びますかい、銀貨をバケツにダunk。この一枚が、未来のスーパー銭湯へ続くのだつ、とか内心思つてたりするが今は心の中だけで叫ぶのみ。

一風呂浴びて、流水で冷やしたフルーツ牛乳（セルフ調合ドリンクバールール）をがぶ飲みして、同じく風呂上がりの村人達にまた明日、と手を振る。

さて、帰りつくまでがお仕事です、と、ブンブカ刀鎧を振つておっぱいおっぱい歌いながら家路を急ぐ。

あと閑話だが、帰り道ジェットは名曲。

一日の終わりはそつと愛の歌～とくらあ。

そして上機嫌に終わるはずの一日にケチが付くのは、その数分後のことであった。

月明かりの下、通常視覚と気配視覚が捉えた光景。

人型武装集団の行軍と、血にまみれ息も絶え絶えに道ばたに転がる、見知った彼。

乗っていた馬は既に逃げたのか、馬具や馬の体の部品は転がってはいない。

普通一対多数は、こんなものだよね、と。

彼へのトドメに振りおろされた人型魔物の剣を。

〈瞬間移動〉で割つて入つて受け止めて。

ひとまず手加減なく、蹴り飛ばしてみた。

手応え（足だがね）充分、吹つ飛ぶ人型（不確定名）。

間合いさえ離せば、後はこちらのもの。

足下の血達磨に〈白銀癒手〉を振りおろし、後顧の憂いを絶つてから。

「推して、参る」

無限袋から愛刀を引き抜き、敵集団に向けて先制の横薙ぎ一文字く

カマイタチ。

灰剣士程の剣腕があつたらこれで終わってるんだよなあ、と苦笑いするのは仕方ないよね？

周囲は夜闇、星明かり程度の光源で動ける敵を鑑みるに暗視もちかとなると、敵は・・・等と考えつつも、自分の足は一定リズムを刻み続ける。

あの器用お化け、こんなのを常に続けてたのか、と、一体だけの分身維持に必死扱いてる自分をあざ笑つてみる。

しかし、これで充分。

ブラーとかドッペルゲンガーとでも呼べばいいのか、ただ単に像をブレさせるというだけで、回避行動が歴然と楽になる。

開戦から数分経過。

既に集団の半数ほどは斬り捨ててみたが、一向に引く気配もなく。仕方なし、と腹をくくると。

自分は永久化した魔法を、発動した。

気配の目で見た限りなら背後でグツタリしている彼は気絶中であるうし、もう面倒になつてきてもいた。

風呂上りに運動させよつてからに。

次瞬、まとめて襲いかかってきた人型武装集団は、自身の攻撃と同等の魔法衝撃を受け、自滅していく。  
<報復>魔法結界。

相手の攻撃を吸い取りそのまま返還する外道魔法である。野望その一として、長きにわたつて金策を繰り返した末たどり着いた上級魔法であった。

個人的には「因果！」とか叫びたくなるけど自重した。  
だから「応報！」は勘弁な。

「死にたくないなら手を出さないよう」「

ひとまず完全武装の小鬼集団だと見ぬいたので、小鬼語で注意を喚起してみる。

返答や、如何に？

「手を出さなかつたら、通してくれる？」

この先にある村襲いたいの、と真っ直ぐな目でじゅぢゅを見てくれる。

「大却下、決裂です」

もつ帰れよオマ・・・・・おま・・・・ん・・・・ああ、おまん食いたい  
なあ、と現実逃避。

ちなみに生ハツ橋を饅頭状にしたものと思つておくれ。

閑話休題、ひとまず全殺し確定入りましたー。

ああ畜生言葉で意思疎通できても相容れないってのが世知辛すぎる。

更に数分後、十数体の敵性集団の沈黙を確認。  
ミッショノコンプリート、なんかくれ。

ひとまずそんなに大規模の集団でなくて良かつた。

以前ゲームで一騎当千計画やつた時の悪夢を繰り返さなくて良かつた・・・数時間かかつたんだよねえ、あれ。

ともあれ、ひとまず氣を失つてる兵隊さん・・・に氣付けを。

「・・・もう訳がわからないよ・・・」

意識を取り戻した彼は、傷まぬ体、散らばる死骸、数日前見た不審者、のコンボにQBる。

「あー、ひとまず」んばんは、月が綺麗ですね」

ひとまずジャブとして挨拶してみる。

つてかこんなプロポーズわかるかよ夏田先生。  
あとどうでもいいけど、今、月が本当に綺麗。

「あー、うー」

もつ本当に何を言つていいやうといつ彼に、ひとまず手を差し伸べると。

「立ちません？あと、ボロボロ過ぎてすごい格好ですよあなた」  
さしあたつて村に行きませんか、と、立たせた彼を促して来た道を  
引き返し。

もはや無言になつてついてくる彼に、言に忘れていたセリフを。

「改めまして数日ぶりです。自分、メリウと申しますが、あなた  
のお名前をお聞きしても宜しいですか？」

そういうば何か忘れてるなあ、と漠然とあつた違和感。

単にファーストコンタクトの兵隊さんの名前、聞き忘れてたつてだけのことだった。

## 探索それは存外の

帰り道にて巡回兵のモノ氏を助太刀してから一夜が過ぎた。  
ひとまず適当な宿屋にモノさんをぶち込んで自分は帰宅。  
色々と詮索されそうな勢いもあつたので「一晩休んで頭の中整理してから話しましょうか」と、ぶつちやけイイから寝て起きろ、と納得させたりした。

そして日は昇り、清々しい朝。

穴蔵から這い出してカムフラージュ用テントを経由して外へ。  
外の人の体が楽すぎて、最近生きてるのが楽しい。  
中の人�품、地味に色々傷んでたんだなあ、と実感する。  
生きるって大変だのう、などと似合いもせぬ思考を重ねていると。

あれ、見覚えあるお馬さん。

モノさんが襲われた辺りをウロウロしている彼の愛馬が田の前に。

「モノさん村にいるけど一緒に来るかい?」

ひとまず馬語にて会話を試みる・・・自分も馬に変身してね。  
こういう使い方が出来るのに気がつくのにしばらくかかつたんだつたか・・・懐かしい。

聞けば、なんとか自分を逃して魔物の足止めをしてくれたモノさんが心配になつて戻つてみれば奴らの死体の海・・・という謎状況に混乱してこの場を動けなかつた、らしい。

「じゃ、のんびりと御主人様に会いに行こつか

手綱を引き、道を歩き出す。

おとなしく付いてくる馬の鼻面を撫でつつ、自分は村へと歩を向ける。

わして、今日は何をしようかな。

村に到着、モノさんを押し込んだ宿までのんびり散歩満喫中。宿の女将さんに挨拶し、彼の部屋の扉をノックノックノック。

「アサダオキロアサダオキロアサダオキロ」

精神病患者のように清々しい起床を強制してみる。

瞬時に開く扉、死んだ魚のような目。

あれ、充血してない？

寝なかつたのか貴様、と、口に出しかけたが我慢。

「おはようございます、いい朝ですね？」

にこやかに挨拶。

「こま、ノックと同時に呪術のような声が聞こえた気が  
モノさん、超不審がつてゐる。

「氣のせいですよ、ああそうそう。あなたの馬、見つかりました  
んで宿の厩に繋いでおきました」

伝えるなり駆け出すモノさんを見送り、自分もゆこと家のペット  
を懐かしんだりする。

元気にしてるかなウチのやんちゃ坊主は……。

朝飯前だったので、ついでに此処で朝飯を食らひまし。

ああ、口メ食べたいなあ、無いからパンなんだだけや。

「なんとこうか、まず言つべきが礼しか無い」

ありがとう、と、相席のモノさんが深く頭を下げた。

あれ、このくん頭を下げる系の風習なんだー、と、ビツでもいい事を考えつつ。

「いえいえ、出来る」とをしたままでですの。ビツにもならなければ逃げてましたよ」

なので、お気になさらず。

手に負えなければ即時見捨てる人間です、とひとまづ正直に血口弔告して評価を下げる。

「いや、それは普通の事だらう。むしろ出来てもやらない類のことだ」

だから、ありがとう、だ。

モノさんが良い人過ぎて生きているのが辛い。

「分かりました、ひとまづお気持ち受け取つておきます。で、一晩経つて頭の中はまとまりましたか？」

食後の水を飲みつつモノさんに尋ねてみると、何聞かれたらどれ答えよう的なマニコアル作成のために、せいいじこら辺の知識を仕入れさせて頑くとしましようか。

「ああ、それでは命の恩人のキミに質問だ。まず、ビツやつて瀕死の私を健常な状態まで戻したんだい？」

どう考へても、私の怪我は致命傷だった、と、それが一番不思議でねと続けたモノさん。

ひとまず自分は、ストレートを投げてみる。

「魔法です」

豪速球。

何言つてるんだコイツ的な顔されたら冗談で通すし、何だとー、的な流れなら逃げる。

わて、どうかな？

「やはり。 そつとしか思えないし、そつであるべきだ」  
モノさんの言葉に、なんか怪しげな「オイ」がしてきた気がする。  
そつであるべき？

「実は、私がこの周辺を巡回しているのは訳があつてね。 キミの  
ような魔法使いを発見、保護するという事を行つていいんだ」  
上からの命令で、なんだがね、と、モノさんが笑う。

「そんな訳で、メリウくんだったかな。 首都まで御同行願いたい  
のだが」

若干腰を浮かした気配がしたが、すぐにそれを下ろすモノさん。  
ああ、職業病でつい逃さない体勢を取つてしまつたのを悔やんでる  
んだ。

「ああ、すまない。 キミの意思を尊重せずに不躾な態度をとつて  
しまつた」

この通り、と再び頭を垂れるモノさん。  
ああ、腰ひつくりなあ もつ憧れてしまつね。

「ああ、お気になさらずに。 行きますから」

ひとまず、保護して回つてくる、といつなら顔見知りの数人は捕ま  
るかもしない。

しかしこの場所が自分達面子の拠点であることは変わりなく。  
何がしかの物を残しておくべきだら。

「でも、申し訳ないんですがもつ数日お待ちいただけますか？ 一  
応お世話になつた村の人挨拶をしてきたいので」

拠点宣言もしちゃつてゐし、戻つてくる気満々ではあるけど変に拘

束とかされたら変な心配かけちゃうかもしれないし。

「それは勿論。一応私は上にキミのことを報告して戻るよ。数日したら迎えに来るので、その時は同道願うとするよ。」  
今度は昼間に、後はもう数人連れてくるよ、と笑つてモノさんは早足に村を出発していった。  
しかし、上が、命令、ねえ。

「最悪なのは、魔法使い希少説で魔法使い狩り。最高なのは上の人気が知人PCって流れかなあ」  
運命という名の現実の先を推理してみる。  
展開的にはどうなるものか。

つとしまった、彼が次来るのは何日後か聞いておくべきだったか。  
ひとまず魔法が存在するという世界背景はあるようなので、一応用心のために村の外へ出てから。

自分は「飛行」を解き放ち、モノさんを追いかける。  
ものの十数分で追いつき、並走して正確な日数を尋ねた。  
最初は空からの声に驚きもしたようだが、すぐ慣れた様子で「3日ほどだ」という返答をいただく。

「分かりました、では、三日後に」

手を振つてしばしの別れを告げる自分。  
手を振り返してくるモノさんを後日に、自分は村はずれまで蜻蛉返りすると早速あいさつ回りを始めた。

小銭は溜まつた、食うには困らない程度の備蓄であるが。  
世話焼きな村人からのささやかな頂きものが、酷い量に膨らんだ。  
日持ちしそうなものは無限袋に入れ、そうでないものは早めに消費

するように別の袋に入れて道すがら使つたり食べたりする予定。ひとまず後は濁さず済みそうだ。

といったところで、工作の開始、といひ。

ひとまず、掲示板を作ろうと思う。

文字通りの掲示板、あとはメモ用に紙が欲しいところ。

ふむ、と考え、ひとまず自分が向かつたのは。

「世界樹」、我らが麗しの拠点「塔」であった。

探索がてらの材木集め、程度に考えていた「世界樹」訪問だったが、中は予想外に荒れていなかつた。

流石に木製の家屋などは見る影もないが、その他は少し手を入れれば史跡レベルに見栄えする観光名所になるだろひ。

「最近客も少ないって言つてたから、手入れされなくなつたってことかな」

ゲーム時の記憶と照らし合わせながら、ひとまず目指すは侍ギルド。訓練場辺りはどうなつてるかな。

しばらく記憶を頼りに歩き、迂回し、たどり着いたその先には、苔むし荒れ果て朽ちた建物が、あつた。

「ただいま

軽く頭を下げる。

綺麗に草畠になつた中庭などを見ると、少し胸が痛む。

そして建物の中には、入らないほうがいいと判断を下した。人の住まない建物は痛むのが早い、と聞くが。

一体どの程度人が居なければ、こうなるのだろうか。

「健在状態から何年経った、か。メンツハウスにも言えることだよねえ」

石造りの頑丈優先ハウスですら、あの有様だった。が、地下部分は驚くほどの痛みがあつたわけではなく。

「何者かに破壊された、が、わかりやすく納得できる答えかね」頭にくる話だが、仕方なし。

望まざるとはいえ、住んでやれなくなつたのは事実であるし。ほう、と一息溜息をこぼすと。

自分はく飛行へで宙を舞い、隙間を縫つて屋上空中庭園を田植した。

もはや庭園は見る影もなく。

無秩序に生い茂る大小の木に埋め尽くされ、真ん中の大木に吸収された様に森という一本の木に擬態していた。

ここら辺から適当に材料を間引かせてもらおつゝと、愛刀を抜き加工を考えて材料を切り出す。

音もなく切断を成していく愛刀に感謝を捧げつつ。

太陽が一番高くに位置して地上を照らす辺りの時間で。自分はそれを、発見した。

見覚えのある、一つ扉。

中を覗けば、自分の時と同じような作りの密室。

そして、開け放たれた扉の中、床に刻まれた6本の傷。それは、果たして。

自分がこの世界で過ごした日数と、同じではないか？

自分は即座に目以外の目を見開いた。

気配視覚、及び魔力視覚。

肌を目とし、魔力を目とした。

まだ、近くに居てくれるか？

周囲をくまなく目ならざる視覚で射ぬく。

居なければそれは無事な知らせ、とばかりに安心出来る氣もするのだが、と。

自分は、それを、見つけた。

それを見つけて走り、弱々しい呼吸で伏せる彼女に、ひとまず急ぎの光腕をぶち込んだ。

きゅつ、という甲高い悲鳴を上げて地面に伸される彼女。

アレから五年だと、もう高校～大学生くらいかね？

「いつたいなー、何するん！」

元気よく立ち上がった彼女は、文句をいう相手をまじまじと見て。

「ひとまず、久しぶり。こんなもんしか無いけど、食つときな？」  
好意でもらつた生鮮食料を袋ごと彼女に渡すと、時間を止めた彼女にテ「パン」一つ。

「ひとまず一人目、痴口リングつとだぜー」

デコの痛みでしゃがんだ痴口リン・・・侍組最年少の女侍ことエリスとの、再会であった。

## 旅立ちそれは暗雲で

ひとまず材木と、友人一人を拾つて村に戻つた。

一定距離を離してついてくる友人を、内心苦笑いしつつ。

あー、気になるか女の子だし。

平氣平氣、それほどでもない、と内心思いつつ。

自分は取り急ぎ、村はずれの施設準備を整えると、バケツに銀貨一枚投入。

「湯加減はどうだねエリスさんやー」

女湯の一重衝立越しに、湯浴み中の痴口リンに聞いてみた。

「サイゴーでーす」

ちょっと熱めが好きなんですよー、と江戸っ子氣質な答えが帰つてくる。

それはなにより、と返答し、その場を離れて周囲を警戒。

・・・異常なし、念のため空とかも警戒しようかとも考えたが、鳥一匹飛んでいないようなので杞憂といつものか。

六日間の引きこもりだもんね、汚れもニオイも気になるだらうや・・・と、ゲームだつたら心配もないようなことを思いつつ。

女湯の釜近くで材木を取り出し、自分は生産加工メニューを開いた。網膜投射的な効果なのか、VR的に生産窓が開く。

PC的ゲームスキルは使用可能であるらしく。

外からみれば自分が鋸や鉋で看板を作つているように見えるが、實際は道具選択と材料選択を行つただけである。

「ふむー、精密生産は自分自身がやってるつて感じなのに対しても、簡易生産は外の人がやってる他人事つて感じだよねー」

結局、現状の把握に対する判断材料を再確認できた、とでも思えばいいか。

ゲーム的な要素が地形などしか無い世界。

ゲーム的要素を使用できる外の人に入った自分。

この世界・・・に、ゲームデータをぶち込んで、混ぜた・・・となると、この世界そのものも、リアル系ゲームとして見ればいいのか・・・？

そしてこの場合、自分は外の人に引っ張られてオマケで此処にいる羽目になってるのか？

断言は出来ない所がアレであるので、ひとまずは思考中断。

取り急ぎ、大看板を掲示板として村の入口辺りに立てさせてもらい。簡易生産で作つた羊皮紙を貼りつけ。

「俺は・・・ここにいるっ！ スケエエエエエエ・・・  
・・・ベース。

嘘です、ちゃんと書きました。

メリウより親愛なる友人達へ。  
ひとまず首都に行つてきます。

エリスも拾いましたので、念のため同道することになりました。  
何事もなければまた戻つてきますが、首都に来るか此処で待つかの  
判断は、お任せします。

月 日。

P・S・  
生きてろよー

そんなこんなで日数経過。

予告通りに迎えが来た。

今回は流石に単騎ではなく、程々に重装の騎士が一一名程お供に。

「おまたせしました」

綺麗に礼を送つてくるモノわん。

おおお、なんかカコイイー、と歯エンジンをギュンギュン回すエリスにチヨツチヨツ。

「で、そちらのお嬢さんはメリウさんのお仲間ですか?」「はぐれた仲間の一人か、との問い合わせである。

「はい、仲間の一人と申つか、妹的存在と申つか」「間違つても腐つていることは語られてはならぬ。」

自分は心に誓つた。

具体的にはモノさんを、汚染から守るために。

「ほひ。 ではこの方も、と思ってよいのでしょうか?」

モノわんが言外にエリスも魔法を使えるのか、と聞いてくる。

自分は小さく頷き、ひとまず自己紹介をせよつとエリスを背後から引っ張り出す。

「エリスと申します。 道中よろしくお願ひします」

ペコリ、と頭をさげ、ボロが出ないレベルでの自己紹介は終了。

ほつと胸を撫で下ろし、エリスを再び背後に戻す。

「では、行きましょう」

馬車を用意しましたのでこちらへ、と促される。

自分でけならともかく、多人数移動で徒步は勘弁願いたかった為、渡りに船で正直助かる。

「乗り心地は良くないのですがね」

申し訳ありません、と、頭を搔くモノさん。

四人乗りの屋根付き馬車の扉を開くと、どうぞ、とばかりにエリスに手を差し伸べた。

おおジエントリー、と感心したが、

「馬車つてはじめてー」

と、差し出された手に気がつかなかつた痴口リンがズカズカと乗り込み。

モノさんと自分、男一人で苦笑い。

すいません、天真爛漫な奴として、と一応フォロージみた事は言つておく。

苦笑いのまま、お気になさらず、と御者席へ行くモノさんの背中を見送りつつ、自分も馬車へと乗り込んだ。

さて、のんびりと馬車旅の始まり、始まり。

しばし時間は戻り、自分とエリスと合流して飯風呂済ませて一応の用心としてハウス地下に引きこもつて一息ついた頃。

自分と彼女は現状把握のため、この世界（仮定）についてから今までのことを語り合つた。

自分の話は搔い摘めば扉を開けたら落つこちて川流れの末に空飛んで、道見つけたから一晩歩いて此処にいる、というだけなので詳細までは語りずにサクッと報告。

対してエリスの話は。

自室にて課題のレポートそつちのけで東京タワー×通天閣×嫉妬に狂うエッフェル塔のコピー本原稿を描いていたところ、一瞬の停電。気がつけば見知らぬ密室に外の人工リス姿で放置プレイ。恐る恐る1つだけある扉を開けてみたらあらビックリ。

鬱蒼と生い茂る、縁縁縁。

閉めて開けて閉めて、を数度繰り返し景色が変わらぬ事を確認する。エリスはひとまず、引き籠もつて眠りについたそうだ。地味に一徹してたそうで、夢でなくても幻覚とかかなあ、とか、きっと原稿描きながら寝落ちしたんだ、的に思っていたフジがある。で、目覚めればそこには一つ扉。

うあああ、夢じゃなかつた、夢じゃなかつた、と、空腹に耐えかねて手持ちの袋から懐かし外見の携帯食料を発見し齧り付き、味の凄まじさに悶絶したそうだ。

「なんというか、肉の香りの微かにする高野豆腐を、戻さずに齧つたみたいな感じ」

味気なかつたんで捨てようと思ったけど、いつ新しい食料にありつけるかも分からなかつたのでひとまずキープしておいた、らしい。で、その後は部屋の中でふて寝したり、コソコソ外に出て花を摘んだりしたらしい。

正直、風呂に一週間近く入れなかつたのはコミケ前の修羅場以来で厳しかつたです、とエリスは語つた。

記憶が確かなら・・・こつちに飛ばされた日が、そのコミケだつた気がするけど・・・うん、女の子に聞いちゃいけない事柄な気がしたのでスルーしておいた。

自分にもそれくらいの情が、あつた。

で、日は過ぎて喉の渴きに刀の露をすすり、食料が尽きて仕方なしに草でも食むか、と覚悟を決めて外出し、目を回して行き倒れた所を自分とエンカウント、らしい。

「一週間ぶりのパンとかベーコンとか、泣くかと思いました  
ぶつちやけ、食べながら泣いてた。

「そか、ひとまず無事でなにより、だつたね。 もつ少しだけアク  
ティブに動いてたらあつさり村発見できただらうけど」  
で、普通に宿に泊まつたり温かい食事を摂つたり出来たんだらうけ  
ど。

「いやいやいや、さすがにそれは結果論ですよう。 私都会っ  
子なんでこんな縁なす場所に放置されたらへタに動けませんよう」  
半泣きのエリスを宥めつつ、まあ、そんなもんのかね、と適当に  
頷いておいた。

ちなみに自分は山育ちなんで、ぶつちやけ樹海に放置されても鼻歌  
交じりで脱出できたりする。

くそつ、役に立たねえ中の人技能だなオイ。

「さて、で、現状の不可思議な点としては・・・何でゲームキャラ  
の中に入ってるのん、って事ですかね」

自分の手を開いて閉じて、と動かしつつエリスが言う。

「だね。 まずは昔のゲームで作成したキャラの技能そのままに、  
ソレになつてしまつている事」

自分は言いながら、人差し指を立てる。

「次は、ゲームの地形そのままの場所に、放り出された」  
人差し指に引き続き、隣の中指を立てた。

「シンプルに、ゲームの世界に入っちゃつたー、とかなんでしょう

かね

ああもうメルヘンだなあ、とエリスが憤慨。  
「こうじうのは一次元だけでお腹いっぱいですよう、と、頬をふくら  
ませてこる。

「んー、たしかに単純に考えるならソレでいいのだろうけど。 実  
際問題として、ゲームにあつたものでここにないもの、とかも多々  
ある」

ぴっと、薬指を立てつつ。

強いて言つなら「ミュニケーションツールなどがソレにあたる。  
メールに掲示板、ギルドなどの組織も怪しそうで。  
あとは神様との交信も出来なかつた。

「え、神様ダメだつたんですか！」

くそぅ、地味にポイント貯めてたのにー。

地団駄踏むエリスさんたら、見てて飽きないリアクション芸人。

「うん、自分も欲しい魔法とかあつたんで試したんだけど。 ダメ  
だつた」

つまり、神様経由の授かりものパワーアップが、禁じられてる。

「だから、新しい魔法とかは・・・可能性の問題だけだ、PC間な  
ら、もしくは・・・と期待してたりするよ」

訓練ポイントとかはどういう扱いになるか分からぬけどね、と続  
ける自分。

たしか、コンセプト的には「訓練にひと用費やす」という単位だつ  
た氣もするので、みっちり一月師事しないとダメなのかもしそれ。

「うー。 なんといふか、世は不思議に満ちてますね」

早く帰つて原稿の続きを描きたいー、と、整えた寝床にダイブするエ

リス。

もつ考へたくない、ねたーい、とか騒ぎ出す始末で。

「はいはい、んじゃおやすみ。自分は廊下に出て右手法で進んだ先の2つ目の部屋にいるから、何かあつたら諦めて死ね」にこやかにエリスを見捨て、即ダッシュで去る自分。

「はーい・・・え、最後なんて・・・ணணண」

ツツコミ途中で力尽きたのか、エリスの漢らしい寝息が聞こえてきた。

場面戻つて馬車の中。

往復三日の時間で行き来可能ということは、一日半未満の旅路といふことかー、などと考へながら、揺れの激しい車内で尻を叩かれつ。

「うわあ、思つてたより早いんですね、馬車つて」

満喫してゐるエリスの楽しげな姿に、少し心がなごむ。

「まあねえ。車レベルは出ないけど立派な移動手段として確立された物だしね・・・はしあきすぎて落ちるなよう娘つ子」

クッショーンになるものないかなあと無限袋を漁りつつ、窓を開けて風に髪を踊らせてはしゃいでるエリスに落ちないよつ注意を促す。

「はーい。メリッさんつてウチのサブリーダーみたいだねー」引率の先生みたい、と言つてくるエリスに、

「大学生にもなつてそのはしゃぎ様だから、過去は推して知るべし、

だよね。Hイジの苦労が忍ばれますわヨヨヨ」

同士は今何やつてるかねえ、と、物思いにふける。

あとは、ひとまずクッショーンがわりに昔討伐した四足獸の毛皮を丸めて尻の下に引く。

おお、案外いいクッショーン性能。

「あー、メリッさんだけズルイー。私にもプリィーズ！」

歴史書に残るようなプリーズを吐きよるわ・・などと笑い合いつつ、自分は竜の鱗を差し出した。

「わーい、このハードな感触と若干の粗さが私の尻を削り一つで口

ラあ！」

べちつと、と、叩き返された鱗を仕舞い込み、仕方なしに回じょいつな毛皮を投げて渡す。

「さんくすー、うわーい、モフモフだー」

座るといろが寝転がり、毛皮にじゅれ出すHリス。

「ダメな大学生があるわ・・・」

最近の子はこんなに幼いのだろうか・・・と、我が国の教育について頭を悩ませる。

ひとまず日 組漬そづぎ。

「ふーんだ、今私は一五歳のエリスだもーん。歳相応だもーん  
もーんとか言わない、と突っ込みつつ。  
ガタガタドッカン馬車は進む。

そして、その数時間後。

夜の帳が下りるか否かの、明るい闇の中。

その一団は、  
現れた。

## 遭遇それは幸運で

護衛一騎に緊張が走る。

即座に馬車と一団の間に割つて入り、鞍から槍を引き抜き警戒態勢。道を遮るように一塊になつてゐるその一団は、長い流浪を思わせるボロボロの外套姿で統一された、とてもとても怪しげな集団だった。

「何者ですか？」

御者台の上からモノさんが一団に問う。そこから動かないところを見るに、最悪の場合は轢き逃げアタックしてでも走り去る算段か。

ソロ活動で死にかけてた辺りといい、結構武闘派なのかもしだ。モノさんの問いに、怪しげな一団の先頭にいた男が答える。

「助けて欲しい。子供が魔物に襲われて大怪我をした」

どうか、この通り、と、目深にかぶつっていたフードを取り払い、頭を下げつつ答えた男の顔を見るなり、護衛一人が驚きの声を上げた。

「魔族……」

「もう、こんなところまで……」

嫌な予感しかしないフリをありがとう。最悪の気分だ。

「とまあ、このままグダグダやつても氣分悪い流れしか見えないのでサクッと状況を進めてみる」

自分は気軽に扉を開くと友人の格闘家の真似をして音もなく跳躍、着地。

あ、ちょっと……と制止するモノたちをガン無視して、一団

へと近づいた。

「怪我した子供って、どこです？」

大怪我と言つてたね、時間が惜しい。

答えが返つてこず、もう面倒だから一団を「見る」。

集団の真ん中、守られるような布陣で・・・すぐさま消えそうな小さな気配が「目に止まつた」。

「え、あ・・・？」

「はいはい、失礼しますよーっと」

先頭の男を華麗にスルーして一団を搔き分け。

集団の真ん中。

母親らしき人に抱えられた、ソレ。

どす黒く固まつたボロ布を包帯替わりに巻きつけられた小さな小さな塊。

微かに、ほんの微かに呼吸しているように、見える。

赤子、といつても差し支えない幼子だった。

「間に合つた。 よく頑張つたね」

〈白銀癒手〉。

必要以上の気合を入れた回復魔法が幼子を撫でるように包みこむ。すると・・・なんという事でしょう。

弱々しかつた呼吸は穏やかでしつかりした寝息に。

あからさまに足りなかつた体の欠損部位も、瑞々しい肌の張りをもつた、まっさら状態に再生したではありませんか。

そんな状況に驚きを隠し切れない周囲をよそに、口々で匠の粋な計らいが。

「あー、皆さんも結構、体傷んでますねえ・・・」

スキヤンがてらに気配視覚で体表をみた感じ、結構痛そうな方々が

多い・・・  
<全究回復>。

光の雨が、流浪で削れた一団に降り注ぐ。  
痛みを押し流す鮮やかな光雨に、一団は誰からともなく天を仰ぎ見る。

「神よ・・・」

あー、まあ、偉大なる自由神様にでも祈るがいいさフハハハハー。  
と言つといひで、ミツションコンプリート！ なんかくれ。

「では、これで失礼をば。 お大事に」

まだ呆然と、全快した幼子を抱きしめている母親的な人（不確定名）  
に笑顔で別れを告げ、行き掛けの駄賃に寝てる子供の頭を撫でて報  
酬とさせて頂く。

あー、間に合つてほんと良かつたわさ。  
助けられるガキンチョに死なれてたまるか、しかも目の前で。  
自分は来た時同様に一団を搔き分け、先頭にいたく魔族ゝ呼ばわり  
されてた男の人に軽く会釈して。

何事もなかつたかのように、馬車の中へ。

あー、なんか喉乾いたー。

「おかえりー、どうだつたー？」

流石痴口リン、毛皮に横たわつて我関せらずで聞いてきよるわ・・・。

「んー、子供瀕死ー、助けたー。 大人も怪我人ばかりー、助けた  
ー」

無限袋から売り物以外の安酒（要は失敗作的なもので、普段飲みなら充分な味だつた）の一升瓶を取り出した。

そして栓を親指で弾いて引き抜くと、ラツパで三口程流しこむ。  
つかー、んまー。

「た、隊長！ 私も欲しいあります！」  
やけに美味そうに見えたのか、痴口リンが物欲しげにバクシー・シバ  
クシーシン騒ぎ出す。

「あつれ、飲んでもいいと思つてゐる未成年？」  
お酒は二十歳になつてから。

「うううーー！ ワ、ワタクシ向を睨むつゝ前田に二十歳になつた。  
・」

取つてつけたように血口卑鄙つてくるが・・・とても、疑わしい。  
ちと聞き込んでみるとある。

「えー、んじや西暦何年生まれか即答せよー」

「 年でありますー！」

「まだ18歳の計算じやねえか。 嘘つきには睨として一生Bにて  
関われない呪いをプレゼント」

「げえ、それだけは・・・それだけば」勘弁をお代官様

「隊長なのか代官なのかはつきりせやう」

「すいません」

「 」「 」今まで、テンプレー

漫才してしまつた。  
エリスも満足気に、かいてもない汗を拭う仕草をする。  
しゃーない、別に自分も二十歳前には「二二四二四一、だつたし。

「ミシナ一八、ナイショダヨ」

たまにせせらかしてやうひへ、と、袋から取出します。

# ストック数 10本の最上級

過去オークションで200白銀貨を叩き出した一品（ちなみに、飲めば能力値が上がる等のテーマが流れてた時期での過剰熱を帯びた結果だったので通常だつたらケタ一つ低かった）、称して「神話級」。

「わーいわーい、メリッさんゴチになりまー・・・・うつまあ」

素にかえつた口調で呟いたあとは、ただ黙々と、ちびちびと、飲み進めている。

……いこ聞してんな!! よぐ味わってお飲み!!

真姫は、神説編を呑み、エリスの希少な真顔を見たれりは、眼めこつ、自分は安酒を思つさま腹に流し込んだ。

もつ今田まいの先生終わりでここよね、おやめみ・・・。

コンコンコン、ガチャ。

「あの、あの、ひとまず宜しいでしょうか……？」

困った顔でモナさんが馬車の扉を開け放つた。

背後には魔族呼ばわりされていた一団の代表格つぽかつた男性も控えていて。

「こちらの方が、せめて礼と・・・出来ればお名前を、と  
毒氣を抜かれたモノさんが、魔族男性をズズッと前へ押し出す。  
あつれ、自分酒飲んでるから絡まれるとでも思つたんかな。

ひとまず一升瓶片手に首だけ動かして様子を伺う。  
この時の自分、若干目が据わっていたのかもしぬ。  
外の客人衆が怯えた気配を出した気もしたが。

・・・うん、堅苦しいのも面倒なのも、省け。

「夜も近いし、野営準備しちゃいましょう」

さ、動ける人は手伝つてー、と、眞面目に飲んでるエリスを馬車内に放置して表に出た。

開け開けよ無限袋、溜め込んだ物を出してみせーー、と、若干酔つぱらいモードでシャランラしてみんとす。

生産系の素材は地味に備蓄があるのでー、とばかりに、簡易・詳細の両生産もあわせてハツチャケてしまつた。

結果、家、とは行かないまでも風雨を弾く全面形大型テントが完成した・・・頑張りました。

・・・レシピに落としておけ。

「もう訳がわからなーいよ」

モノさんがQBつて頭を抱えてしゃがみ込み。

「・・・・・」

目をぱちくりさせて言葉もない様子の魔族な人に、ひとまず皆呼んでおいで、と促し。

「『J駆走様でした隊長。 私に出来ることがあればご命令を

く伝説級』を飲み干したのか、馬車から出てきて、いつになく凜々しい様子で聞いてくるエリスに、夕食準備や一団の女性や子供の取

りまとめ他、幾つかの指示を出し。

・・・ちなみに翌日「昨日は」苦労様、真面目になるとカツコいい  
ね」と言つたら「え?」と返答が帰つてきた所を見ると、この時純  
粋に記憶なくなるくらいに酔つた状態で軍人口ールプレイしてた模  
様。

閑話休題。

「さて、では楽しい楽しいキャンプの始まりですよー?」

林間学校の引率氣分を楽しみながら、ひとまず場をカオスにしてみ  
た。

魔族、と言う種族が現れたのは、年代も定かでない大いなる過去の  
話、なのだとか。

大昔、天使と悪魔の争いがあり。  
地上に地獄へ続く大穴が開き。

悪魔と共に這いでてきた種族を指して「魔族」とした、らしい。  
で、外見的には人と悪魔を足して、悪魔っぽさを薄くした感じな  
が彼ら、と言う印象。

肌が若干黒めで、額あたりに角っぽい突起があるかなー? くらい  
がその外観。

身体頑健にして異貌をもち、古代の言葉を操り・・・人を喰う、と  
されている、らしい。

「で、そこら辺どうなんですかい、本当?」

ひとまず安酒を樽単位で開放して皆に配り、酒盛りしつつ、魔族の  
代表的な人である所のお名前テトラさんに聞いてみる。

「いえ、基本的に我々は人間と大差はありません……人も食べません。地獄……いわゆる古代文明時代の地表に取り残され、悪魔兵器の雑兵を喰らつて生き延びたのが我らの祖先だ、と代々伝わっています」

テトラさんは一息に言つと、井に注いだ安酒をカバッと煽つた。いい飲みっぷりすぎる。

「どこかで聞いた記憶がある話になつてまいりましたデジャヴ。つてか、テトラさん達つて「悪魔喰い」の子孫だつたんだねえ」  
きゅきゅーっとマイ一升瓶の中身を減らしつつ、昔のゲームを思い出す。

一目見てスルー決定した、いわゆる「希望」シリーズクエスト。ぶっちゃけると古代文明を滅ぼした天使と悪魔の抗争系歴史発見クエストだつた訳なんだが、流れ的に天使に味方して悪魔と戦い、本拠地の地獄へ侵攻し……な流れとなつたときに「悪魔喰い」という新種族開放がなされたわけだが。

歴史的背景はまんまテトラさんが語つた通り。で、種族性能は身体的能力が高く、外見が悪魔寄りつてだけ。  
・・・ああ、魔族と呼ばれねばそうかなあ、という外見ではある。確かあの時は、えーとなんて名前だつけ。

「あーつと、えーつと、ボイドじゃなくてレイじゃなくて……  
ヌル、か」

「ヌル」、だつけかね「悪魔喰い」を纏めてた人にして、新種族開放クエストくれた人。

そんなことを口にした途端、テトラさんが驚きの声を上げたりした。超絶語りだしたので、箇条書きでお送りします。

- ・何で「悪魔喰い」の事知つてるの？
- ・ヌルつて1000年前のウチら伝説の長老様なんだが。

・つてか本当にアンタ一体なんなのさ？

うん、要らん情報が増えた。

酒が入つてゐるんで推理も後回しにする。  
でも、ひとまず覚えておくべきは。

時代的に希望>シリーズの千年後が、今。

・・・つてことは、塔、1000年経つても大丈夫、なんだ！？  
すげえぜウチラフレームソン、超石工過ぎて逆にヒク。  
そして我が家H・・・流石に1000年は越えられなんだか・・・  
頑張つたんだろ？なあ合掌。

さて、そろそろテトラさんが酔つ払つて絡み始めたので、退散  
するかのう。

「えーっと、酒入つちゃつてるので細かい話はまた後日、といつこ  
とで」

細かく分身して体の像をずらじ、掴みかかつてくるテトラさんから  
逃走。

お待ちをー、と追いすがろうとする彼に周囲の死角をつき、えい当  
身。

キュッと悲鳴上げ、毛皮ひいた地面に突つ伏すテトラさん。

ひとまず一人になつた自分は、酒盛りサバトを觀察・・・騎士二人  
は魔族さん達と肩ぐんで歌うたつてますが・・・善きかな善きかな。  
モノさんはどうしてゐるか・・・あ、いた。

外で周囲警戒とかしてゐる辺り、真面目だなあ・・・。  
結界張つてることとかは言つてなかつたつけ。  
つまり自分のせい。

「お勤め」苦労様です」

一応酒も勧めてみるが、仕事中ですので、と固辞される。

「世情も分からないのでひとまず酒入れてみましたけど・・・結構適当に差別偏見はあるんですねえ」

「げえ魔族！的な反応だったんでどんな確執が！？」と思つてたんですけどね、と続けてみる。

「ええ、詳しく述べ私が語るより歴史書辺りを参考なさつたほうがいいでしょ」「う

それなりには色々あつたんですよ？ と、意味ありげに言うモノさん。

まあ、単純時間換算で言つならそつだらうひうねえ・・・ってか、よく国が千年保つたねえ。

「恐らく、私の国はあなたの知る国とはまた別のものだと思いますよ？」

「それ程歴史はありませんしね、と続ける。

「ああ、そうかー、我が鉄の国は滅んだかー。

「ん、色々と情報入つてきて混乱してきました。ひとまず仮眠取ります」「う

何かあつたら起こしてくださいな、と言いくて、モノさんの近くに横になる。

きっとこの人のことだから、夜通し頑張つてしまつ氣もするので。ひとまず時間指定の「覚醒」魔法を自分にかけて、数時間後に起きることにする。

ではではひとまず、酒盛りの喧騒を子守唄にして。

ガキンチョー一人も助けられだし、いくらか現状に対する情報も増え

た幸運な日には、サヨナラ。

おやすみなさい。

## 道行きされは情報で

おはよいひじやーこます。

番犬役の自分です。  
ごきげんよう。

寝ろ、寝ない、の闘いになつた夜番を賭けた∨Ｓモノわん戦をく睡  
眠ゝ魔法で大人げなく勝ち上がつての朝でございます。

地平線から登る朝日を温燭飲みながら眺める贅沢をしつつ。  
昼間暖かくてもそれなりに夜は冷え込みますねえ、などと独りじ  
て。

んー、と伸びーつして。

では、朝飯の準備でも始めますかのう。

く魔族くさと達に振舞つやつたので食材が尽きた。

もつ少し日持ちするような物を用意しとくかな、と思いつつ。

「では、我らは先を急ぎますので此処でお別れですね」

く睡眠くから目覚め、朝食準備を手伝ってくれたモノさんがく魔族  
く一団との別れを口にする。

あつれ、遭遇時の反応からしてこのまま行かせりやつたらマズイの  
では、と思つたりもしたのだが。

「行きずつの旅の一団と一緒に夜を過いじただけです。 何も問題はあ  
りません」「  
と、ニヤリ笑うモノさんが、ちと愉快。

「「あー、隊長狡いー、即座に美味しいとこ持つてこくその姿勢はどうゆうことなのー」」

騎士さん一怒からブーイングが上がる。

「もうこのまま彼らも連れて行きましょうよー、ビリせ人手はいくらあっても足りないんですしー」

騎士の一人が言つ。

ほー、人手、足りないんだ？

「いやいや、落ち着きなさい。私的にはソレもいいかな、と思うのですが・・・昨日の私や君たち自身の反応を思い出しながら、モノさんの言葉にハツとする騎士一怒。あー、すっかりお友達気分になつて忘れてたかー。

「魔族・・・もつるんなとこまで・・・」エリスが物真似して要らん油を注いだので、即制裁チョップびし。無駄に似ていたのがまた腹立たしい。ほら、騎士さん達黙つちやつたじやないか。

「・・・と、言つわけです。なので、ひとまずはコレで納得して下さい」

身内に言い聞かせると、モノさんは一団に振り返り。

「申し訳ありません。小さなお子さんもいらっしゃる方々を保護も出来ぬ現状でして・・・」

深々と頭を下げるモノさんの姿に、脳内のレッジアラートが鳴り響いた。

うへえ、額面通りに受け取ると・・・幾つか考えたくない可能性が上がつてくるなあ。

例えばほら、何がしかの戦争終結直後だつたり、とか、ね？

焼け野原復興に関して、不意に湧いた魔法使い捕まえて働かせよーぜー、という流れだつたらどうしたものか。

・・・よほどキチガイじみた「上」でなかつたら働きそうな自分がいる・・・。

「いや、気にしないで欲しい。 むしろ子供を助けて頂いただけでも我らにとつて奇跡としか言いようがなかつた」

その上、露に濡れぬ寝床と酒席まで設けてもらい、何をこれ以上・・・と言葉に詰まるテトラさん。

ただ、心残りは・・・と、自分をチラ見していく。

「・・・あー、どうしたものかなー」

そう言えれば昨夜、色々話すよー、とか約束した覚えもある・・・んー、どしよ。

自分が戻つてくるまでこいつら辺でウロウロしていく、とは言えないし。

かと言つて代表格っぽいテトラさんだけ連れていくのもアレだし。

「もうこいつそ騎士さん達二人に護衛頼んで、皆わんをく世界樹前く村まで送つてもらえばいいのかな」

で、皆への偏見が強いようならく世界樹く辺りに滞在してもらつて、ソレの監視つてことで騎士さん達に物資補給及び対外的な防壁になつてもらえばいいのでは、と提言してみる。

よそ者の自分でもそれ程苦もなく受け入れてくれてたし、いけるんじゃないかなあ、なんて楽観視していたのもあるけど。

「おお、一二兎を追う妙案?」

メリツさん伊達に長く生きてないねー、と茶化す痴口リン。

「それは・・・」

ちと考えこむモノさん。  
危険がないと思われる難民チックな人々の保護も視野に入れられる  
か、と、思案顔。

「〈世界樹〉？」

首を傾げるテトラさん。

人を避けて移動とかしてたなら知らなくても不思議はないが。

結局、騎士さん達二名の後押しもあり、自分案で行つてみようとなつた。

ただ、様子見で村の人には〈魔族〉というのは極力隠し、村でなく世界樹に直接行こう、という流れになつたが。

モノさんは、一応念のためと村長宛に一筆書いて「長にだけは事のあらましを伝えておきましょう」と手紙を騎士に託し（自分も念のために文面を盗み見たけど不振な点はなかつたのでホッとした、二重の意味で）、真剣な顔で騎士達に令を出す。

真面目な顔でそれに頷き、騎士達は一団の護衛として自分達と別れ。

首都へと向けて、自分達三人は出発した。

馬車旅はのんびりと。

自分は御者台、モノさんの隣に陣取らせてもううい、彼に国とやらの現状を聞きながら長閑に進む馬の蹄音に脚でリズムをとつている。カポツ、カポツ・・・カツポー死すべし・・・モゲロツ、モゲロツ。

「現在我が国は、独立戦争の疲弊から辛うじて立ち直つた、といった所でして」

ポソリポソリと返つてくる言葉に相槌を打ちつつ、先を促す。

何度もかになる大きな国の建国、戦争、小さな国の独立。

飢餓や疫病等の「ラスボス」が蔓延する戦の爪痕生々しい辺り。

それが、今らしい。

「そんな中現れたのが、一人の「魔法使い」でして。 ちゅうじめりウさんとお会いした日のことです」

なんでも、怪我人病人に満ち溢れた教会廢屋壁面に突然現れた扉をくぐつてやってきた男が、瞬く間にその場の全員を光雨や光腕、更には光剣のようなものでバツサバツサと癒しまくつてそのままどこかへ去つた、そうな。

「荒れ果てたとはいえ一応国の体裁はあるわけでして。 傷つき病んだ国民を救つた英雄を探せ、といつ命令が出されまして。 それで近隣を兵が駆けまわることになり・・・と言つ流れですな」  
そして、夜道をゆく貴方に遭つた、と言つ次第です、と、モノさんが語る。

「ふむ。 ぶつちやけモノさんは、その癒しまくり怪人が自分なんじやなかろうか、と思つたわけですか」

だから死にかけてたモノさん回復したのが魔法とわかると「そうであるべき」なんて思わせぶりなこと言つたんじや・・・。  
しかし、光雨、光腕、そして光剣・・・ねえ。  
モロに「全究回復」  
「白銀癒手」、それに「浄化」だなあ・・・全  
部使える坊さんに心当たりがありまーす。

「はい。 で、実際はどうなんでしょう?」

にこやかに小首を傾げるモノさん。

ははは、「ヤツ分かつて聞いてやがるなどうしてくれよ!」

「えーっと、似たようなことは出来ますが、自分じゃないですねえ。むしろ、自分の仲間がその条件に合致したんですねえ。世界は広いし、坊さんでない可能性のほうが高い気もするけど。何故か、犯人はヤツだ、と自分の第六感が囁いている。

「癒された人の証言とかで、その魔法使いの外見情報とかは集まりなかつたんですか？」

ひとまず情報収集。

つてか、ヤツなら目立ちすぎてどう考えても一発バレ必至のはず。

「はい、それがですね・・・背が高い、といふことは皆共通の証言なのですが」

細部が、マチマチなんですね・・・と、モノさん。外套を目深にかぶっていた、いや素顔だった、むしろ骸骨だった、痩せていた、ふくよかだった、筋肉質だった・・・等、相反する様なものまで含まれていたそうな。

うわああの野郎（脳内確定）、扉から出てくる前に「幻影」纏つて見た人固有の印象操作しやがったな・・・！

ああ、それなら見つからないわけだ・・・きっと、奴は。

「はー・・・。ナルホドナルホド。 大体わかりました・・・」

ひとまず、気が抜けた。

そして、仲間の一人が、行く先で待っているという確信が持てた。

今頃奴は、のほほんと観光チックにそちら辺をねり歩いてることだらう・・・。

「え、なにかお分かりになつたんですか？」

すわ、英雄様の所在とかですかつ、と鼻息荒く食いついてくるモノさんの顔をガツと掴んで前を向かせつつ。

「恐りく、ですけど・・・そのく英雄>とも、まだ首都に、いますよ？」

見知らぬ所で迷つたら動かない、の法則を遵守する彼だったら、恐らくは・・・と言つ注釈はつくけれど。

それから数分、自分はモノさんの顔を鷲掴みにして強引に前を向かせたままで居なければならなくなつた。

頭に血が上ると血行・・・結構猪突な人なのだね、キ!!。

ちなみに、やけに静かだなあ、と思つたら。

「ニニニニ」

ウチのお嬢が、涎垂らして熟睡こいていたりしつうん、長閑のどか。

自分は、ヒゲを書き込んだ。

## 到着そこは始まりの

首都、到着。

それなりの規模を持つ、大きな町のようだ。

そう、大きな、町である。

間違つても都市ではなかつた。

50m上空あたりで見渡せば全域を視野に入れられる程度の町が、モノさん曰くの「首都」であつた。

しかも、ここは・・・。

「方角的にもしゃと思つたら。ここ、始まりの町か」  
ネットゲームの テスト最終イベントにてあつさり滅んだはずの、あの町。

その後は廃墟として復興もされずに見捨てられたと聞き及んでいた、あそこである。

「建物とかは大きなの以外全然別なんだね」

眠りの世界から帰還したヒゲ痴口リンが、馬車の窓から上半身乗り出して周囲を観察。

危ないから身を乗り出さないよーー！」。

「そうだね。むしろ滅んだって聞いてたから大きな建物も全てダメになつてるとばかり思つてた」

振り返つてエリスに注意をしつつ言つ自分。

「ほ、滅んでませんよ？物騒な嘘話をしないで下さこつ  
ギヨッとして声を上げるモノさん。

ああ、自分の国の首都を滅んだはずだの何だのと言われればいい気分はしないだろうけど。

「あー、その、なんというか。自分達が知っていた場所に似てるなあ、と」

あはは、と乾いた笑いを上げて茶を濁す。

「・・・一度じっくりと、お話を伺うべきなんでしょうかね・・・」  
ちょっと座ったモノさんの目が、怖かったりなんかして。

素直に話しても状況が好転する気がビタничしないので、どう考えても嘘しか言わないけどねえ自分。

「そこいら辺はそのうちゆっくりと。で、結局自分達は首都の、どこのどなたがいる所に向かっているんですか？」

なんだかんだで聞いていなかつた事柄について聞いてみんとする。最初に聞いとけよ的な事だつたけど、ある意味ビうでも良かつたのでスルーしてたのですが。

「私達に英雄搜索の令を出した、騎士団長にお会い頂きます」  
民を虐げた王族に反旗を翻したクーデター首謀者で、ある意味今の國の王様みたいな方なんですがね、とモノさんがぶっちゃけた。  
初耳。

「歴史がないとか言つてたのは、単に独立して新建國した赤ん坊な國だからって意味ですか」

正直、権力者とかにトキメけない性質なので、数日前の会話なんかを思い出しつつ茶々入れる。

あ、そうやつ、数日前で思い出したけど。

「あ、話の腰をへし折りますけど、迎えに来てからモノさんの口調が変わつたのは何故でしょう?」

頼れるオジサン口調から、にこやか爽やか系テンプレ詐欺師口調に

変わった気がするね。

「え、あ、はあ。 実は私はこっちが地でして」

それなりに部下がいる手前、普段から演技も必要なわけでして、と苦笑い。

ふむ、幾らかは気安い奴と認識されたのかのう自分。ならばよいのだががが……。

「あー、いまさら メリウくん、今までの口調は忘れてくれたまえ。・・とかイイ声で言われても笑うしかなくなりますしね」  
幾らかでも肩肘張らずに話しきるんだつたらそれに越したことありません、と、ケタケタ笑つてみる。

「あー、出来れば笑うのは」勘弁を。 つと、そろそろ到着します先程から苦笑いしつぱなしのモノさんが、表情を引き締めた。

さてさて、状況はどう流れますかね。

通されたのは首都中央に位置する・・・ゲームの記憶だと公園とか噴水とかあつた辺りに建てられた簡素な建物の中だった。  
事務処理でもしてるのか、羊皮紙の山に埋もれる初老の騎士が気難しげにこちらを踏みしていく。

人相悪いので、無意味にガンつけられてるよつて気分が悪い。

「なんかいけ好かない爺ですね？」  
思わず素直に言つてみた。

「「ちよつ」」

モノさんとエリスが慌てるが、なんというか正面倒になってきているので、巻く。

「こんにちは、メリウと申します。ひとまづこの町の怪我人病人を助けたというく英雄様ではないですが、似たことは出来ると思います。それを踏まえてお聞きしますが、自分に何か用ありますか？」

聞きたいことだけ聞く。

初老騎士はしばしガンつけたまま固まつていたが、不意に力を抜くと、愉快そうに笑った。

「モノ、愉快な人を見つけてきたね」

おや、やけに声が若く、高い。

そんなに興味もなかつたのでちゃんと見ていなかつたその騎士の顔をよく観察する。

老いの表れのシワだ、と思つていたものは、火傷で引きつった痕であつた。

顔全域が、焼かれていた。

それも恐らくは、子供の頃に。

そして恐らく顔だけでなく体広域がああなのだらう、と、外の人知識が囁いている。

それを加味して、声の感じから察するに。

彼は、それほどの年かさではないのだろう、と憶測できた。少なくとも・・・自分よりは年下だ、と感じた。

「お初にお目にかかりますメリウ殿。僕は騎士団の長をさせていただいてるノナと申します」

椅子から腰を上げ、丁寧に頭を下げる団長さん。うん、ひとまず聞いてみようか。

「とりあえず、ノナさん。 その火傷、治します？」

すれ違う人が、振り返る。

四人連れ立つて食事でもと外出した時から、衆人の目が向けられていた。

足取り軽いモノさんと、二コヤカなノナさんは、気づいていないようで。

「ノナさん、女人とは見抜けませなんだ・・・」

私とどっこいの胸装甲の薄さだったしな、とはエリスの言。

「それは自分もだわさ。 もろにモノローグで彼呼ばわりしちゃつたわさ」

どうでもいいことだけど語尾にわせつけるとわせビーフが食いたくなる自分。

悔しい、でもそんなもんここにねえよちくしょう。

先ほど答えも聞かずにノナさんに光腕ぶち込んでしまった訳ですが。あまりに劇的ビフォーアフター過ぎてちょっと驚いた。

なんという事でしょう、初老の男性とばかり思っていた人物が、みるとみるうちに見目麗しい女性に成ったではありませんか！

・・・ねえよ、と、エリスともども突っ込んでしまったのは仕方あるまい？

「でも、よかつたね。 今でも痛くて仕方なかつたんだつてね」

エリスの言葉に、そりや そุดらうさ、と返す自分。

むしろ、よく生きてたねレベルだと、素直に思つ。

出迎えてくれた時のアレも、ただ単に普段通りの痛みに顔をしかめ

てただけなんだうなあ、とか思つと膾躰つ早い反応してしまつた自分の子供つぶりに絶望したりする。

「あんまりに痛ましくて強制治療しちやつたけど、クレーム無くてよかつた・・・」

この火傷は！ 僕の生きた証だ！ とかロマン語られたらどうじようかと思つてました。

最悪、じゃあもう一度焼くよ？ とかの流れになつた、のか・・・？ 爆炎壁に女人の人押し付ける自分を想像して、胃の腑がキュツとなつた。

一応快癒を喜んでいただけてるようなので、ホッとしておりますが。

自分とエリスの十数歩先。

軽やかに、踊るように。

痛まぬ体で跳ねまわるノナさんと、それをすんごいイイ笑顔で見守るモノさん。

道行きがてら断片的に、幼なじみー、とか彼女のために騎士にー、とかは聞き出した。

有り体に言つと、とつ捕まえて三秒で吐かせた。

そんな王道的関係に、やおいじゃないけどエリスもトキメイたらしい。

やおいじゃないけど。

「さて、んじや二人の世界に突入しそうなモノさんノナさんを追いかけるとしますかー」

そしてモノさんの奢りで容赦無く飯食おうぜー。

大人の本気を見せてやるつ・・・無駄にな！

「あいあいー」

腹減つたー、と声高く同意するエリスを引き連れて。

なにか忘れているような気もする首都観光？が始まった。

「あつれ、ウチの出番は・・・？」

今回は、なし。

## 昼食それは蒼白で

食事をとつつつ情報収集。

世間話と自分内常識の、すり合わせ。

自分とエリスの食欲に、顔色を青から白に変えて諦めに満ちた薄ら笑いを浮かべているモノさんをにこやかにスルーしつつ。

「自分達の言づく国への意味・範囲と、あなた方のそれとに、こんな差があるとは」

モリモリと容赦なく15本目の鶏モモ焼きを胃に収めつつ独り「」ちる。

ああ、シンプルな塩味うまい。

塩ふつて焼いただけでこの味つてのは素晴らしい。

と、シンプルな料理に舌鼓打ちつつ世間話なんかをした結果、彼らの言づく国への範囲が、実に自分の認識の「市」に近いということが判明した。

都市国家、とか言えば聞こえはいいのかもしれないが単に人が少ないのだろう。

結果、集つても大した集団になりえず・・・という流れだろうか。

「僕達からすると、そんな大きな国があつたという事のほつが驚きなのですが」

控えめにパンを摘むノナさんが、自分の語つた「国」の規模に対しう驚きと疑惑の声を上げる。

顔面蒼白のモノさんも、コクコクと頷いているが・・・。

あー、物資不足の折の豪勢な食事だものねえ・・・高価いだらうなあ、他人事だけど。

「ゴチになりましたー。」（過去形）

「私達の国は4つの町を治める大国、という感じなのですが。それを全て併せてメリウさん達の知る一都市の半分にも満たない、とは・・・」

驚きです、とモノさん。

先程から水を少し含んだ程度で食事は摂っていない。

「聞いた限りの人口だと、50人位が敵と戦つても大戦争扱いされそうですね」

きゅーっと口に頬張った肉野菜その他を水で流し込んだエリスがフオーラをくるくる回しつつ茶々を入れる。

空いた皿の量は自分と同等、やるな痴口リン。

伊達に欠食児童じゃない。

「ははは、大は付かないかもしけませんが確かに戦争の範疇になりますね」

騎士団員の半数が出張る事になりますからね、とモノさんが続けた。

「ふむ。 クーデターやら何やらで人同士が争える余裕があるってことは、魔物とかの数は少ないんですか?」

なんだかんだでここ一週間程度過ごしてみて、魔物との遭遇はモノさん瀕死事件の時だけだし。

魔族(仮)さんたちを襲ったのは、また別の魔物だったのかなあ、とか思うと、少なすぎる気はしないのだけど。

そんな自分の疑問に、さつと二人の顔色が陰る・・・おい、まさか・・・。

「いえ、実はこのところ、魔物の数が増加しているようなのです」  
一匹二匹程度はよく見かけられ、十四程度の集団の目撃例も上がっている、という。

「そんな中でクーデターやらかさなきやならないと判断せざるを得ないほど酷かつたんですかー、この国の王様」  
口元をハンカチで拭つていたエリスが、なんともいえぬ表情で聞く。

「それについては詳しく述べると口が暮れますので結論だけ。 酷王でした」

ノナさんが実際にイイ笑顔で親指を下に向けた。  
その仕草、この国にもあるのか・・・。

「余りの酷さに王を守る騎士団そのものが敵に回りましたし、クーデターといつても殆ど無血勝利という感じだったのですがね」  
お陰様で人同士の潰し合い、というほどの被害は出なかつたのですが、とモノさん。

あれ、でもそれだとおかしくないかな?

「だとすると、何で神殿跡に多数の病人怪我人が居たんですか?」  
と言いつつ、あ、と気がつく。

もしかして、だから、酷い、と言つたのか・・・?

「そのご様子だと気が付かれたと思いますが・・・そうです、王の暴虐の被害者があそこに集められていたのです」

それとは別に、圧政による貧困、飢餓、それに付随する病の蔓延・・・と、ほんの1週間前を思い出したのか、語るノナさんの口調は重みを伴つた。

きつと。

殆ど死体置き場と同義だったんだろうな、と、思った。

「そんな訳で、最初は殆ど玉碎覚悟で暗殺を狙おうという形だったんですね」

そんな中現れたのが、そのく英雄・・・・・癒し魔・・・・・だった

く。

「押し込められていた病人怪我人達が嘘のよつに健常に戻り・・・中には死人が生き返つたという眉唾な報告も上がっていますが・・・怒り心頭の彼らが王に突貫したのは言つまでもなく」  
あー、それ、きっとホントに生き返つてゐる。  
リアル死に戻りだつたら、そりや・・・凄まじかう、色々と。

「その勢いのままに周囲を巻き込んでの暴動に発展。 もつ革命と呼んでいいのかもしませんが」  
モノさんがノナさんの説明を引き継いだ。

「そして、それを鼻で笑つた王が騎士団に鎮圧を命令して・・・棒切れ振り回す奴隸共を蹴散らしてこい、などと口走つたらしい。いやあ、よくその王様それまで生きてられたなあ。  
自分を守るもの・・・多分騎士団・・・を、そんなに信用してたのかねえ。

「で、華麗に騎士団の矛先が、王に向いた、と  
なるべくしてなつた、って感じですなあ。

暴動の規模が大きすぎて騎士団員が田和つたりもあつたんだろうな  
あ、とは口に出さずにおいたけど。

「そして当時の騎士団長、つまりモノが父を・・・王を討つて暴動  
は終了しました」

ノナさんが淡々とした口調で締めくくつた。  
あー、そういう流れかー。

「ふむふむ、どうやって騎士団に言つ」と聞かせてたのかなあ、と  
疑問だつたけど。 ノナさんが人質だつたのかな」

頭の中で状況をシミュレートしてみんとす。

王様：暴君。

ノナさん：人質（対モノさん用？）。

騎士団：人質を盾に従わされる。

住民：奴隸扱い、王様やそれに言いなりな騎士団に恨み？

「暴徒が王の首を獲る前にモノさんが又殺して騎士団の点数稼ぎして、幽閉されてたノナさん救出して団長代替りして武力（権力）持たせる。さらなる点数稼ぎに騎士団動員してく英雄探し…つてことでいいのかな」

大雑把に状況を組み立ててみた。

どうでしょう、と一人に目をやると、小さく頷いている。

大筋で合っていた、という事かな。

「そしてモノがメリウ殿に出会つて、今に至る、ですね」  
他の騎士達が戻る中、モノだけが中々戻つて来ないので肝を冷やしました、とノナさん。

あー、最初は深夜の搜索で、そのまま村とか巡回して…で、魔物の集団に殺されかけてた、と。

「となると…今この町には、自分とエリス以外の「旅人」は居ない、ということでしょうか」

恐らく潜伏してるだろう坊さん含めても3人か、と思いつつ。

「はい、残念ながら貴方がた」と出会つ幸運に恵まれたのは私だけのようとして

魔法使いの保護、なんて思わせぶりなことを言つてしまい申し訳ありません、とモノさんが頭を下げる。

ザクザク人數居たら流石に顔見知りでなくとも気がつくしなあ。

自分もエリスも、地味に探査系スキル充実してゐるし。  
仕方なし。

んでは、議題・今後のことについて、と行きましょうか。

「英雄探してたら類似品見つかっちゃったと言つ感じの自分達は・・  
・ひとまず用なしという形でいいんでしようかね?」  
あの癒しマニアが潜伏してるとするならば、もはやこの国と言つか  
町には重篤な患者は皆無だらう。

予想通り奴がいるとするなり。

きっと辻斬りならぬ辻癒し＆即逃亡くらいはやつてのけるはず。  
もしくはスニークゲリラ癒しやらバックステップ的癒しもしているか  
もしがれず。

むしろ夜中に空飛んでく全究回復の雨を降らせ続けるくらいの狂  
った絨毯爆撃すらやりかねん。

嫌な絵ヅラの想像をしてしまい額に汗をかき始めた自分を奇異な瞳  
で見つつ、モノさんが口を開いた。

「いやいやいやいやいや・・・大恩あるあなた方にそんな、用なし  
だなんて・・・」

大慌てで立ち上がり超否定ポーズのモノさんがちょっと面白い。

「私はなんにもしませんがなー」  
これエリスさんや、ふてくされない。  
正直な所、君は秘密兵器と言つ切り札なので、今はまだおとなし  
くして下さい。

「モノの助命。僕の治療。少なくとも僕達一人は貴方に返し切  
れない恩が出来ています」  
改めて、と深々と頭を垂れるノナさん。  
併せて頭を下げるモノさん。

「しかし、僕達からお返しできるものがないのが・・・」  
心苦しい限りで、と、搾り出す声色が苦く響く。  
そんなに気にしなくていいのにね。  
無い袖は振れないものだよ。

「いや、もう何度もありがとう、とお礼はいただきましたし。それでいいんじやないですかね」  
別に命を削つて皆を助けるといつ幸福の王子的なイイハナシじゃない。

謎状況で苦もせず手に入れた暴力的な能力で好き勝手やらせてもらつてるだけだしね。

なので、そんな切なそうに一人してこつち見んな。

「んー、あ。 それではお願ひと言つか頂きたいものがあるんですけど」

ふと思いついた。

一応モノさん巡回してたんだからああそここの国の所属なんだと思うし。

え、モノ? と、コレは僕のですか?と言に出したノナさんにチョップかまして。

・・・エリスさん? なに鼻息荒くしてるのかな? かな?

「↙世界樹へ、自分の物にしてもいいですか?」  
「言つだけならタダだしね、と思って。  
思い切つて言つてみた。

## 強襲それは食料で

「世界樹」・・・・「塔」の所有権とかくれないかなあ、といつもチヤぶりへの返答を待つ一瞬が長く感じた。

そして、それがノナさんの口から発せられる前に足元から全身に伝わる、地響き。

「！？ 地震？」

そもそもトーブル下に避難するエリス。

「いや、構造上この世界には地震ないだる」

地獄ならござらしらず、と呟きつつ表へと駆け出す。

地響きは定期的にやってくる。

そして、脚から伝わる振動が、どんどん大きくなっていた。

肌が告げる振動の元へ、目を向ける。

町を囲む柵の先、強大な肉の壁がまっすぐに向かって向かっていた。

「ああ、こんな感じになるんだ。歩くだけでこの振動とか」

視覚情報だけで揺れてると、実際に脚やら肌やらから感じる振動の違いがこんなにも相手の巨大さを実感させてくれるとは。

「いつたい何が・・・！？」

自分を追つて食堂から駆け出してきたモノさんにノナさんが、ただ啞然とした。

あつれ、最近口へんには回つて来てなかつたのかね。

昔は月に一回は來てたと思うんだけどなあ。

「懐かしいねメリッさん。ベヒモスだねー」

おお、揺れる揺れる、とはしゃぎながら現れたエリスの手には、彼女の愛刀がある。

坊さんが居てくれたとしても、三人、かあ。

ヤレなくもないか・・・最悪自分が・・・になればいいし・・・、と、打算的計算完了。

「モノさん、町の人達に避難指示ヨロシク。行つてきまーす」  
ヒヤツホオウ、肉だ肉だー、とハイテンションなエリスを引き連れて、懐かしのベヒモスめがけて突貫。

火に強い表皮をしているといつても、焼けないというわけではない。

〈爆炎壁〉を町前に展開し永久化。

三重に重ねた灼熱の壁に少なくない損傷を与えられて後退するベヒモス。

ひとまず、進路妨害程度にはなったか。

「まず足を止めないと。先生、お願ひします」

自分の先生コールに応え、どーうれー、と、似合わぬ爪楊枝をくわえて半身立ちするエリス。

手には抜き身の愛刀〈水神刀 蛟〉。

〈塔〉トップグルーパーの一角。

侍組の最年少剣士にして、最終〈剣聖〉。

その視線の先には巨獸ベヒモス、わずか二十数メートル先にあるビルのような足。

「秘奥 雲斬りの太刀」

両手で握つた〈水神刀〉の刀身がエリスの意思に従い金属から水の

ごとく変化した。

水精剣化。

灰剣士の雷神剣同様に、魔法化する物理攻撃。

肩に担ぐように構えたその水剣が、気合と共に振り下ろされる。

「アツ――――――!」

何度聞いても、その気合はどうよ? と突っ込まざるをえないが、なんとか我慢した。

ついネタを仕込んでしまつ芸人気質には拍手を送りたい。

気合と共に振り下ろされた刀が、地面付近でピタリと止まる。

ベヒモスとの距離は変わらず。

傍からは只の素振りにしか見えぬそれは。

空を往く雲を断ち、地面までを一直線に裂き。  
透明な水の飛沫を伴い飛んだ鎌鼬が、容赦なくベヒモスの右前足、  
後ろ足を縦に切り裂き、足の外側半分ほどを切り飛ばした。  
最大射程距離2・4kmを誇るエリスの秘奥義（多重奥義の奥義化）。

文字通り、雲を斬り裂く太刀であった。

「流石剣聖殿、G」

仕事は終わった、とばかりにヒターンしてきたエリスと、白銀癒手  
>ハイタッチを決めつつ労をねぎらつ。  
るエリス。

「今思つたけど、頭狙つてたらそのまま持つていけたのかな?」  
上がつた息が瞬時に整い、痛みに地面をのたうつベヒモスを観察するエリス。

性が良かつただけだと思う

いかに奥義、いかに魔法化といえど。

技は武器の属性に依存する。

刃物は丸い硬度の高いモノに、やや弱い。

頭を狙つていたら、最悪弾かれてしまつたやも知れぬ。

「そかー、難しいねえ」

小さく舌を出しつつ、再び秘奥の構えをとるエリス。

逆側の足を削いで移動を禁じる腹づもりのようだ。

流石侍組の冷徹サブリーダーに仕込まれてただけはある、容赦無い。すわ、自分もしかしてもう出番なくね？

足元から響く振動に違和感を感じつつ居たまなさを・・・何だこの振動？

今日の前で地面をのたうち回つてゐるベヒモスの揺らす地面の振動・

・・とは別のリズム。

震源は・・後ろ・・町、だと？

「エリス、あと頼んで、いいか」

爆炎壁越しに町を睨む自分に違和感を感じたのか、エリスも何かを探りだす気配。

そして、彼女の表情も硬くなつた。

「任せて。即トドメさしてソッチ行くから！」

頑張つてね、とサムズアップ、即時自分に背を向けてベヒモスを着実に切り取つていく。

「そつちも氣をつけて。もう秘奥義は使わないほうがいいよ

一発で息上がつちゃうからね、と、一応の注意をしつつ。

自分はく飛行>魔法を解き放ち、宙を舞つた。

まさかの、挾撃だったようだ。

組織だった行動では無く、ただ単に偶然が重なつただけなのだろうが。

エリスが戦闘中の場所から町をまつすぐ突つ切つて反対側。町敷地内への侵入を許し、ベヒモス一匹目・・・ベヒモスBと呼称する・・・が、足元を躊躇していた。

ベヒモスBは、気の赴くまま歩いているだけ、なのであるが。

「踏み潰されるアリ気分はいかがですかってか」永久化した魔法を全開放しつつ、自分はベヒモス直上をまつすぐに上昇していた。

こまめに削つている隙がない。

このままでは十数分で町が終わる。  
ならばどうする?

「ひつする」

雲を突き抜け息苦しさを感じる場所から、一気に直下へ向けての急降下。

あの器用さお化け、こんなのをいつもいつも使ってやがつたのかキチガイめ、と毒づきながら。

高高度からの加速つきスカイダイビング、スタート。

空気の壁が永久化された防御壁に弾かれて割れるような音を連續させる。

ゲームでは影響を受けなかつた、空気抵抗。

そしてさらに言つながら、このまま突貫したとしても当然のようじ自分も同等ダメージを受ける、ということ。

ゲーム物理の恩恵は、無からう。

「信じてるぜえ魔王産結界魔法つ」

皆に強制的に覚えさせたあの魔法。

ああよかつた、強引に覚えさせといて。

機能さえしてくれるなら、これは間違いなく生命線になる。

愛刀を引きぬき、突きの構え。

空の槍ならぬ、空の刀。

迫り来る地表、どんどん大きくなる標的、燃える民家、逃げ惑う人々。

様々なものが視界に入り、一瞬で消えた。

そして着弾前の刹那、自分の目に与つたのは。

上空からの脅威に本能で気づき、思わず空を見上げたベヒモスBの。嫌に澄んだ、大きな瞳の輝きだった。

ビヂツ。

やりすぎた。

着弾直後、ベヒモスの頭から肩口あたりまでが粉々に吹つ飛んだのは確認した。

悪かつたのがその後で。

勢い良くぶつかることだけ考えていたので、止まるという発想がなかつた。

いや、一応止まるつもりはあつたのだが、地味にベヒモスの肉なり内臓なりで止まるんじやないかなあ、という適当極まりない他力本願だつたのがいけなかつた。

対象を貫通破碎した拳句に、自分は地面に激突。

容赦無く地面にクレーターをこしらえて、20m程も埋まつたのだ

ろうか。

即時瞬間移動などで脱出すればまだ良かつたのだろうが。

視野は真っ暗、慌てて上を仰ぎみれば。

首を失ったベヒモスの地が、滝のように降り注ぐ。結界に阻まれて自分を取り囲むだけに留まる血の海だが、そつそつゆっくりもしていられない。

周りを血に囲まれば呼吸すらおぼつかない可能性もある。ああ、結界魔法バンザイ。

激突で粉になることも、血の海で溺れるハメに陥ることも回避できた自分は、即座に瞬間移動で直上100m程へと退避した。

一瞬の暗転の後、空に躍り出る自分。

眼下にベヒモスの死骸を見下ろしつつ、周囲は焼ける民家の地獄絵図。

先ほどまで逃げ惑っていた人々は騎士と思しき連中に誘導されて火の手のない大通りに集まっていた。

避難しそびれた人は、いないか？

焼けだされた範囲を飛び回るが、幸いにも猫の子一匹見つからなかつた。

ホツと胸を撫で下ろしつつ再びある程度の高度まで飛ぶ。そして使うは「雨乞」の魔法。

文字通りの雨を呼ぶ、まじないの如き低レベル魔法。しかし低レベルと侮る無かれ。

威力さえ出してしまえば……この通り。

沸き立つ叢雲、鳴り響く雷鳴。

数分後、土砂降りの雨が、降り注いだ。

「頑張つて駆けつけたら濡れ鼠にされたとです……エリスです……」

天然のシャワーだね！ とか言つたら殺されそうな田で睨まれたので五体投地で謝罪する羽田になり申した。

仕方なしに洗濯魔法にてドライクリーニング。

地味に血まみれだつたけど、そんな近接戦になつたの？ と尋ねてみると。

「最後つ屁で、吐血されました……わざわざで二倍早く動けそつなカラーリングでした……」

災難、だつたねえ。

ホントホント、つてか、メリつさんなにレザードさんの真似してクレーター作つてんの？ 馬鹿なの死ぬの？ むしろ死んだかと思つた！ とかエリスとじやれ合つてると。

「ありや、急いで来る必要はありませんでしたか」

メリウがベヒモスの死体の下敷きになつたときは肝を冷やしましたよ、と、どこかとぼけた口調が、頭2つ分高い場所から下りてきた。エリスと二人、その声が聞こえた方向に向き直る。

長身の男が、そこにいた。

身に纏つた外套はがき裂きだらけで痛々しく、毒々しい血のシミがそこかしこに染み付き。

どこかの戦場から戻つたかのよつなひどい格好であったが。

「ソッチも何してたかしらんけど、大変だつたっぽいね」  
見た感じ怪我もなさそうで、正直ホッとした。

「シン、と彼の胸板をノックしつつ。

「二人目、坊さんゲットだぜー」

古代、神はそれに無限に大きくなることを許したといつ。終末の後に食物として供されるように、ヒ。

最古の飼育牛のこと、ともいわれるそれ、ベヒモス（という名の巨 大生物で、けしてオリジナルではありえない）の死体が二体分。あつらえたように、そこは物資乏しく備蓄を食いつぶして存続して いた小さな町（住人にとっては大きな国）があり。

さらには歩く食肉を屠殺した人ならざる人がいて。その人外が、食肉加工から保存までの処理及び設備建造までを瞬く 間に行い。

以て、動物性タンパク質が、溢れた。

「では、わざわざ歩いてくれた食肉さん」に感謝を込めて、乾杯！

かんぱーい、と、周囲の住民たちも思い思いのグラスを掲げ、一氣 にその中身をあおった。

自然の驚異による首都滅亡の危機が一転、謝肉祭に早変わり。

酒池肉林じや、酒池肉林じやあ。

「！」でトリビア。酒池肉林にはエロい意味はない

焼き肉の塊を両手に装備して、昔懐かし悪魔神官じっこをしていた エリスなどに向けて要らない知識をたれ流してみた。

ちなみにこれを教えてくれたのは、今なにをしてるかわからない灰 剣士だつたりする。

「えええー、酒の池、肉の林で、どうしてエロい意味ないんですかー！」

おかしいですよメリウさん、と、酔いで赤くなつた顔に？？？と疑

問を浮かべてエリスが憤慨する。

・・・なぜ憤慨・・・?

「EJの前描いた同人誌で、誤用してしまったやもしれませぬ・・・」  
肉を食べきつてから地面に○△状態になるエリス。  
ああそんなことだらうと思つたよ。

「相変わらずブレませんなこの子は」  
むしろ腐り具合が酷くなつてゐるのでは、と、魔法による偽装を解  
いたジオが、おおらかに笑う。

「つむ、地味にく塔所属の全男から、奴に見られたら掛け算され  
るぞ! と恐れられたかつてより純強化されたのが今の姿だ・・・  
つ」

恐れおののけ、とばかりに震えて言ひ自分こ

「うええええ、何で私の趣味がバレてたんですか初耳ですかそれ?」  
エリスが、意味のわからぬことを画つた。

「えつ?」

「えつ?」

「EJをどうすればアレでバレないとか思えたの? 、と自分。  
なにそれ怖い、とジオ。

「えつ?」

さも不思議そうに驚くエリス。

・・・、助けて同士エイジ・・・。

自分は思わず頭を抱えた。

ひとまず人目のつかぬところへ消えます、と、モノさんとノナさんに言い放ち（当然返答が返つてくる前に逃げた）、適当な場所へと河岸を移した自分達三名は、ひとまず互いの近況報告会を行つた。自分とエリスの分は既知の通りであるので省く。

さて、ジオは一体どんな道程を辿つて今に至るのかねー。  
エリスさん、お願いですのでドゥティという発音に過敏な反応しないで下さい。

「では手短に・・・」

胡座をかけて一升瓶ラッパをしつつジオが語つたところによると。

・謎現象で個室の中にテレビポート、洒落で「灯火」よ、とか言つたらマジで使ってビビる。

・ひとまず何があるか分からないので、密室内で自身のスキル確認、外の人を認識。

・魔法による偽装、及び防御系永久化魔法の開放、突貫。

・扉をぐぐるとそこは病人怪我人の掃き溜め。 おいイ大丈夫か今助けるぞ！ と、我も忘れて奔走。

・見覚えあるような廃墟だな、と気がつくのは認識範囲内から怪我人病人死人がいなくなつて一息ついたとき。

・せっかく治した皆が「神は言つてはいる、治つた体で王を誅せとー」とか盛り上がり暴徒レースを始めたこと。

・面倒事の一オイがするので、隠密技能をフル稼働させて事の経過を見守る。

・クーデター成功、色々ゴタゴタしてそうだね、と、ひとまず酒場の屋根裏に潜んで情報収集。

・この町の怪我人病人はもういない、と判断して、近隣の町の様子を見てまわることに。

・「世界樹前」以外の町を回り、病人怪我人などの治療を空からの光雨光剣で済ませ、さあ最初の町（首都）経由で「世界樹前」とやらに行きますか、とした段でベヒモスの襲来。

「で、至る今、という感じですね」  
ゴクリ、と一升瓶を空にしておかわりを催促しつつ、ジオが近況報告を締めくくった。

「でも、結界張つてたんだつたら何でそんなに服とか力ギ裂き作つたりしてるの？」

結構血まみれだし、とおかわりの瓶を差し出しつつ聞いた自分に、「いや、万が一結界に怪我人やらが触れて誤発動なんかしたら大変かな、と思って治療中は結界解いてたんですよ」  
なので、痛みにのたうつ人に引っかかれたり斬りつけられたり、病人に血を吐かれたりしましたねえははは、と。  
ジオがなんともないことのように、笑つた。  
自分、素でこの友人を誇りに思う。

「かつけー、ジオさんかつけー」

強くもないのに飲み過ぎてフワフワになつているHロスもジオをべた褒め。

「素敵！ 褒美にメリッさんを抱いてもいいのよー。」  
ひとまず首絞めて落としておいた。

同士の苦労が忍ばれて、少し泣きだつになつた。  
もつ埋めようか、これ・・・。

「いや、死んだ田で本気に穴掘つたりやダメですよー。」  
離してくれジオ、この肅女は危険過ぎる。

「いけません、土地が汚れてしまいます！」  
ジオの言葉に、はつ、と正気を取り戻す自分。  
そうか、確かにこんなもの埋められたら近隣住民の皆様に申し訳が立たないものね。

「ありがとう、ジオ。 過ちを犯さずですんだ」  
いやいや、いいんですよ、と謙遜するジオと、がつちり握手。

「おいい、いい加減泣くな？ 泣いてしまつや！？」

驚くべきことに自力で氣絶から復帰していたエリスが、拗ねていた。  
ああ、普通にいれば超優秀なのに、なんて残念な子だコレ。  
草葉の陰で同士が泣いているのが手に取るようわかるわ・・・。

「こやいやいや、何勝手に殺してますかメリウ」  
スペックとキレよく自分にツッコむジオは、次の言葉で自分とエリスを大いに驚かせた。

「彼、至極元気にしてますよ」

## 助太刀それはスタイリッシュ人体消失

息を切らせて「ようやく見つけた……」と呻くモノさんとノナさん一人に「ちょっと仲間回収しに行つてきます」、と告げて即時離脱を果たした自分達。

微かに「「ちよつ」「」という脱力した声と、その場に倒れ込むような音がしたような気がしなくもないけどきつと氣のせい。結果的に町単位で腹一杯になつたから明日からきつと頑張れるよ、ふあいと。

そんなことを考えつつ、エリスを背負つて空を舞う。並んで飛ぶジオの指示にて、先を急ぐ。

侍組サブリーダーにして、やや魔法使い寄りのオールラウンダー。剣術馬鹿のリーダーのツレにして、一番胃の痛い役回りの人。そして外面常識人に見せかけた、エロゲーマー。

同士エイジの元へ、今現在フルスロットルで飛行中。

「彼に遭遇したのは、ウチが二つ目に立ち寄つた町……と言つか村で、でして」

何故最初にそれを言わない、とばかりに自分とエリスに地獄突きにてツツコミを食らつたジオが咳き込みながら話したところによると。エイジは現在、その村を守つていてるそうで。

平地で見通しの良い「世界樹前」などと違い、山沿いに位置するその村は昔から魔物の巣窟である山方面からのゲリラ的な魔物襲来に晒されているらしく。

「村の周囲を堅牢な壁で囲み、村人の中から何人かを選んで訓練して歩哨に立たせ、エイジ自身が単騎外周掃除、というのを繰り返しているようですね」

すっかりその村の防衛隊長っぽくなつてましたねえ、と締めくくるジオ。

「うわあ、それに至る経緯が見えるようで怖いわ」「通りがかつて村のヤバい状況を救つて、このまま捨て置けるか、とばかりに持てる力を遺憾無く發揮したんだろうなあ、と、自分の脳内でエイジが壁作つたり訓練したり悪い子いねがア、と魔物狩りする様がやけにリアルに再生される。

「なんてエイジさんらしい・・・」

面倒見が良すぎるんですねウチのサブリーダー、と、ちょっと嬉しそうに言うエリス。

ははは、この義理父的ファザコンめが。

あと、一番面倒かけてる貴様が言つなどうセリフでもある。

「その村には夜中に到着して、気配消して状況調べてはいるときに彼とバッタリ会いまして」

そこへ直れ魔物・・・あれ、ジオさん?・・・いや、幻覚か、チネエ! ちょ、ま、おま、本物! ・・・と言つ流れで。

「チツ。 それは災難だつたねえ、二人の潰し合いにならなくて何より」

にこやかに胸をなでおろす自分。

「力一杯舌打ちしましたね今?」

ははは、こやつめ。

ははは。

がるるるつ!

「何でこの人達はすぐに空氣を殺伐とさせるのだろう・・・」  
エリスが、いまさら一般人のよつたセリフを吐いた。

腐り姫の分際で。

あ、ゲームの方は地味に名作。

変なプレミアについてたけど、今はどつなつてるのかなー。

「で、ジオはサクッとその村単位で癒してこつちに戻つてきた。  
エイジは村が落ち着くまで、とその場に残つた、つてことでいいのかな」

言つ自分の言葉に、頷くジオ。

「ええ。で、ウチもこの国周囲だけ怪我人病人見回つたらあつちに合流して、出来れば魔物根絶くらいまでは持つていく心づもりでした」

戦力が増えたので、案外夢物語でもなくなつて来ましたねえ、と笑うジオ。

「ふむ、でもエイジだつて単騎で結構な使い手のはずだけど・・・  
その村近くの山つて、そんなヤバイの？」

あー、でもそんなんだつたらとつくに滅びてるよなあ、といつ自分に、

「正直、ウチらことつてはどじつとこづい」とのない連中なのですが、  
単に数が尋常でないらしく」

村人を引きこもさせて偵察に行つたエイジ曰く、山向こづいに数千を  
超える魔物の集団が暮らす集落があるらしく。

「普段」村周りに出没するのは、その集落からドロップアウトして  
きたハグレの連中のようだ、といつこと。

「案外キツイ山を超えてやつてくる落ちこぼれ共、か。その道す  
がら疲弊してたお陰で今まで何とかやってこれてた、という感じな

のかー」

そんなのが平時なのに「エイジが守らなければならぬ」とはつまり状況が変化した、と見るべきか。

「ええ、山向こうの連中が、こちらの国に興味を持つて侵攻している、といつことですね」

ハグレ者の逃避でなく、意思を持つた集団の行動。

集団行動が出来るのなら、幾許かの同族意識やら強力なリーダーやらが存在してしかるべき。

うわあ超面倒。

「そう言えば最近魔物増えてきてるとか聞いたっけ・・・」

モノさん辺りが言つてた気もする。

つてことは、侵攻ルートが複数存在するとかも考慮しないとダメか。

「あとは、別の群れが流入してきている、とかですかねえ」

考えられるとするなら、と、ジオが心底嫌そうに言葉を吐き出した。

「しかし不幸中の幸いか、それなりに戦闘力高いメンツしかこっちに来てない気がするね」

人知れず純生産職さん達が死んでいたりする可能性とかは考えたくないでので口に出さなかつた。

〈塔〉のフレームソン連中だつたら血漫の謎技術で20匹程度の小鬼さんは平らにすると思われるけど。

そんな心情が漏れでたか、ジオが苦笑しながら言つてくる。

「あー・・・でも陶芸のお姉さんとか、貧弱瀬戸物アタックー、とか言つて陶器破片で、プラックジャック作つてオーガとか血まみれにしてた記憶しかないですね」

何それ初耳。

つてかあの人地味にウチの格闘家より筋力あつた気も。  
重いからなあ、粘土とか。

地味に重労働だしなあ、窯出しどか・・・。

うわあ。

「・・・なんといふか、別に私達が心配するような事もないと思いまーす」

エリスの声が呑気に答えを出した。

ヤバかつたら逃げる位の事はするだらうし、杞憂といつものかねえ。  
ああ、空が落ちてきたらどうしようつー・ 引きこもるつー・  
・・・どう考へても小学生の言い訳だなあ、故事。

そんなこんなどダベりながら先を急いでいた、数分後。

自分達は、眼下に広がる黒い大地に散らばる息絶えた魔物の新鮮な  
遺骸を発見した。

村に向かつて真っすぐ飛んだにも関わらず、自分達がやつてきた方  
向からの進軍を想定させる迎え撃たれたをしている。

「挾撃、ですかな」

もしくはコレが囮で、別働隊が村を襲つてているパターンですかね、  
とジオが冷静に脳内戦況を組み立てる。

「うわあ、やっぱりそうみえるかー。 まだ焼き討ちとかはされて  
なさそうなのが救いか・・・」

村の方角の空を見る。

雲ひとつない空だ。

無論、地面から湧く胸糞悪い黒煙とかも無いよつだ。  
そしてこの場にエイジがいないということは。

「急ぎましょ、予想外に頭が切れる魔物達のようです」

少なくとも初步的な策を弄して来る程度には、と、ジオ。それに頷く自分。

「はいよーシルバー、『Jーなヘー』

運ばれているエリスが、上機嫌に刀を抜いて行く先を指し示した。はいはい、ではさっさと行くといったしましょつねー。

エイジが築いた堅牢な壁は、辛うじて魔物たちの攻撃を凌いでいた。しかしこのままでは村内部まで侵攻されるのも時間の問題か。空から見た限り、エイジの孤軍奮闘虚しく村は完全に包囲されるようだつた。

いかに強力な個人であつても、所詮は点。

線や面での攻撃は防げない。

そして一番まずいのは、エイジの持つ広範囲魔法の射程内にすっぽりと村が收まってしまうという状況。

もしくは単純にMPが尽きているのかもしれない。

状況的に、かなりエイジは焦つてているだらうことは想像に難くない。

「お待ちどうさま、同士」

ひとまず第一弾攻撃として、サポート爆弾を投入することとする。地面までの高度10m弱の所まで降下すると。自分は躊躇なく背負つた荷物を投下。

よろしくお願ひします、先生。

「どーれー。うわ、ちょっと高過ぎじゃないですかこれ怖アー」

驚く魔物たちとエイジをよそに腕組みした姿勢で地面に降り立つたエリス。

おお、足のバネだけで着地衝撃を逃したぞあの肅女痴ロリン、スゲ

H。

流石腐つても、腐つても、じつよつもなく腐つてもー。

「腐つてる連呼しないでイイから早く周り何とかすれー！」  
アアアアアアツーーー！と気合一閃ほとばしる秘奥義く雲切りの太刀へで周囲の魔物を横薙ぎにしたエリスが叫ぶ。  
はいはい、では同士にチクるのは後にまわすとします。

「んじゃ、自分はあつちもりつね」

ひとまず三方向を掃除しながら・・・逆侵攻してくるわ。

「では、ウチは村周りを」

壁を結界で保護してから・・・ちょっと均してきますか。

こつこ、と拳を打ち合わせて。  
いつものメンツ所属の二人が、出撃。  
その結果は、語るまでもなし。

「ただいまー、あー疲れたー！」

結局山超えて掃除してきちゃつたテヘペロつ。

アレへの変身とく報復>結界の併用が鬼過ぎて相手に同情しちゃつた。

眼下の村周り掃除を終えていた三人に空から声をかける。  
血なまぐさい風がやけに清々しく感じられ・・・ねえよコレ、後で  
掃除してまわらねば。

「おかげで、やけに遅かつたけどだけやりたい放題してたの  
ー？」

結構な返り血に体を染めたエリスがジオに洗濯魔法をかけてもらい  
つつ手を振ってきた。

・・・あー、詳しく述べとグロすぎて夢に見る、とだけ・・・」  
よじてよ。

えーなに聞こえないから降りてきてー、とこうエリスの声をうなぐ  
飛行>を解いて自由落下。

高度エリスを捨て・・・落とし・・・げふふん、の、三倍程度。  
無駄にクリクリと回転しつつ、迫る地面を感覚で捉え。  
さあ華麗に着地、という段で気がついた。

「あ、物理無効結界、解いてたんだっけ  
一つはエリスを背負ってる時に事故でボヨヨン、と弾いてしまわな  
いため。

その後は、<報復>で確実に吸收ダメージを敵に返すために。  
しかも中途半端に格好つけて回転したから、三半規管が狂つてたり  
もして。

やけにゆっくりと時間が流れた気がした。

変な角度で足裏をそれた着地が、地面をえぐり。  
同様に砕けて赤い体液を撒き散らす自分の足先。  
魔法を解いたときに「空を蹴った」のもマイナス要因で。  
良い感じの勢いも、あつた。

痛みは、来なかつた。

だけど段階的に低くなる自分の身長と。

三人の固まつた笑顔が段々空へと遠のいていくのが、やけに鮮明に  
感じられ。

「ああ、自分が地面にめり込んで行つてるだけか」

そんな言葉を吐いたつもりだったが。

その言葉を発することもなく頭の先まで自分の元体である赤に没し。

メリウこと自分は、友人三人の目の前で。

地面にぶつかって綺麗に血の池になるという人体消失マジックを披露することとなつた。

有り体に言えば。

自分は、死んだ。

死を想う。

生活を送るうちに、ただ慣れで生きていると感じたとき。  
この世の誰も知り得ぬ、しかし誰にでも必ずくる未来を考える。  
漠然とした未知への恐怖で、ダレた心に鞭を入れる。

死を想う。

今こうして生き、考へている自分自身は、必ず死ぬ。  
物語でも他人事でもなく、確実に死ぬ。

死を想う。

死後には、何があるのか。

なに食わぬ様子で目覚め、死という眠りに落ちる前とは違つ「自分でない自分」として当たり前に生活していいだろうか？

死を想う。

一番救いがあるのは、何も無いことではなかろうか。  
眠つたきり、それまで。

自分自身が居なくなる。

それで終わり。

実際に後腐れ無い。

願はくば、そうであれ。

そう思つて、瞼を開いた。

・・・考へることが出来ている時点で、それだけはないと分かっていながら。

地面に衝突して愉快グロ死体になつたはずの自分は、今、自殺現場

でない所にいる。

目を見開くと、そこは闇。

もし体があるのなら、と田が闇に慣れるのをじっと待つ。果たして、田が、そこをつづらと補足した。

密室、であった。

あちらに飛ばされた時のようないい飾り気無い密室・・・ではなく。明らかな機会式の操作パネル、手では開かぬあれつスライド式のドア。

足下のカーペットに、天井のライト。

謎広告の貼られた壁面。

実に見覚えある、エレベーター内であった。

「どうしたことだ？」

ひとまず室内を調べよつゝと歩き回る。

まわるうと、した。

しかし、果たせず。

動くことが出来なかつた。

そこでまたしても、疑問。

自分はどうやって、この密室の上下左右を見回した？

自分だけしかいない密室、闇色に固まつたその場所にて。

自分は、死を、想わずには居られなかつた。

瞬きした、と、思われる。

自分自身の体が有つたか無かつたかすら分からぬエレベーター内で、

なんとはなしに、瞬いただけだったと思つ。

その一瞬で、闇色エレベーターは去り。

世界が形を取り戻した。

近くで誰かの泣く声が聞こえた気がする。

その後ろから、怒ったような声も、聞こえた気がする。

血なまぐさい風の匂いがする。

ぼやけた視界に真っ先に飛び込んでくるのは、『じ』と無く安心した感のする、友人の顔であった。

「蘇生、成功……ですかな？」

ほう、と短くため息をつき、友人ジオが手を差し伸べてくる。自分は無言でその手を取り、されるがままに引き起こされた。

蘇生……ああ、生き返ったのか、自分は。

「えーと、ありがとう？」

ひとまず、握ったままの手に力を入れて握手に移行。そのままブンブンと振り回し、感謝の意に花を添えた。

「なぜに疑問系……」

苦笑とするジオの手を解放すると、先刻からイヤな予感がするジオの背後を覗き見た。

エリスとエイジが、超良い笑顔で、自分を手招きしていた。意味もなく、死を思わざるを得なかつた。

そんな訳で、殺られる前に殺れとばかりに。ひとまず五体投地にて謝罪を敢行した。

即時謝罪が自分のジャステイス。

鼻柱がへし折れた氣もしたが、外の人も言つてはいる。

「超謝れ」と。

うおわあ、と、自分の謝罪スタイルに慌てたのかエイジが愉快に声を上げる。

うひい、と、エリスも謎の吐息。

ふむ、ここはさらに置みかけるべきだろうか。

自分は首周りから肩、腰、と体重移動を起こして地面に張り付いた状態から半回転、背中を地面に向ける格好に飛び上がり・・・ブリッジ状態に変形、エクソシストスタイル完成。ギチギチギチ、と、虫じみたアクションを駆使してエイジとエリスに逆さの顔を向けると、満面に笑みを浮かべて謝罪の言葉を口にした。

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ・・・・

やつぱり距離が遠いと謝意も遠いよね、と思い、カサカサカサカサ、と高速でブリッジ走行。

「うわキモッ！」というジオの声が聞こえたが、失敬な。

どう見ても最上位の謝罪スタイルではないか何もおかしなところはないクケケケケケケケケケケケエー！

くふう、鼻血が気管に詰まつて奇声を上げたようになつてしまつたつ、コレはいけない。

あと鼻血がたれて両目の外を縁取つた拳旬に額に向けて重力の導きに従つたせいで、見た目が超スプラッタな気がしないでもないけど自分は元気だからきっと大丈夫。

あれ、ちょ、なんで逃げるのエイジとエリスー。

さあさあさあ、自分からの謝罪を受け取るが良いよんン？

「静まれキチガイっ、破邪っ！」

泣き叫んで逃げまわる二人を追い詰めんがため手足を高速稼働させようとした刹那、ジオの雄叫びと共に自分に対して繰り出される鮮烈な切れ味のヤクザキック。

ブリッジ姿勢の後ろから、槍のような直蹴りが。  
ぐちゅっ。

自分の股間を痛打した。

自分は、死にはしなかつたけど、泡吹いて気絶した。

で、田が覚めると、そこは見知らぬ家屋内の模様。その部屋の真中で、自分はガツチリと縄で拘束されていた。何でさ?

「いや、何でと言われましても、自分の胸に聞けとしか」自分の右爪先をしきりに氣にするジオが、どうでも良さそげに答えてくれた。

あ、先刻潰された自分のボール一個が癒えてる、多謝。超痛かったので潰れたままだったらオカマ言葉で通そつとまで思っていた。

そしてなにより、よく死ななかつた。

二度目の死因、金的、にならずに済んでよかつた。

「友人の正気を取り戻すためとはい、その股間を蹴り潰してしまつた、死にたい」

感触がまだ残つてるんですけどがが、と、ジオが悶絶している。あー、きっと生きしかつただろうねえー。

「メリッさん・・・正気に戻つたか?」

そんな声をかけてきたのは、部屋の外へ通じると思われる扉の外。うつすらと開いた隙間から、二つの左目がこちらを覗き込んでいた。エイジと、ヒリスのようだ。

「失敬な、自分はいついかなる時も正常じゃないか」蘇生した後の記憶が若干ないけど、きっと覚えてないってことは大したことなかつたんだよ。

・・・何故目をそらす、三人とも。

「い、いきなりっ、落つこちてきて血の池になつて！ 何やつてるのこのバカ！」

半分涙目になつて部屋に入つてくるエリス。

あー、ごめん。

流石にアレは自分も猛省です。

外の人補正があると思うのでトラウマまではいかなかつたと思ったいけど・・・。

「し、心配したんだから・・・怖かつた・・・」

半泣きから本泣きへと移行してしまつたエリス。

頭でも撫でてあげるべきか、と思つたが、予想以上にガッチリと拘束されていて身動きが取れぬ。

仕方なく、アイコンタクトで同士に指示を飛ばした。

「よろしく同士エイジ」「了解同士メリウ」、とばかりに痴口リン慰めるのをエイジに任せ、ひとまず外してもらうことに。エリスはグスグスとしゃくり上げるエリスを見て心が痛むが、償いはコツコツとやらせて頂く方向でご勘弁を。

「で、どうでした？ 一回死んでみて」

爪先の違和感から脱したのか、ジオが備え付けのベッドに腰掛けつつ聞いてくる。

「ん。ひとまず、カラオケ屋のエレベーターに、戻つた」  
動けもしなかつたし、自分以外箱の中にいなかつたと思う、とも付け加えた。

ふむ、それは・・・謎な・・・、とジオが黙りこむ。

正直、自分も何がなにやら分からぬ、が。

「ひとまず。ひとまずだけど、〈蘇生〉魔法が自分達にも有効な  
ことが実証された」

こちりで死ぬと、こちりに飛ばされる前に居た場所へ意識が戻る、  
といつ情報も得られた。

コレが何を意味しているのかは、まるでわからないけど。

「ふう――――――。では、肝は冷えましたが。情報取得感  
謝です」

ですが、今度はもつ少し考えて死んでくださいね?と、釘を刺され  
て。

はい、と答えるしかない自分が、此処にいる。

魔法があれば、生き返る。

それはつまり、無ければそれまで、といつことだ。

自分とジオは、基本死ねないか、と。

ガツチリと亀甲縛りに固められた自分は思ひのだった。

## 質問それはバレバレで

拘束から解き放たれ、今までにフリーダム自分・・・っ！  
さあ、何をしてくれようか・・・と一足飛びに外へ駆け出そうとした自分。

勢い良くドアをバーン！

そして今までに部屋に入ろうとしていたエリスをドアでバーン！

・・・その、何だ、『めん。

「ふるはいこのしれもの」  
五月蠅いこの痴れ者、と、睨んでくるエリスさん、正直すまんかった。

エリスの背後にいたエイジと、室内にいたジオが「『何やつてんの・・・』とハモる。  
外開きのドアは、いきなりあけちゃダメだぞ？  
こうなることがあるからなー、以上、本田の教訓でした。

「『めん』『めん、ほーら痛いの痛いの遠いお山に飛んでいけー』  
蘇つて縛られていただけなので色々満タンな自分は、無駄にく白銀  
癒手』でエリスを攻撃。

ペپつと鼻を押された手の上から更なる魔法的圧迫を受けひっくり返るエリス。

しまったこの魔法、地味に「押す」んだつけ・・・。  
廊下をゴロゴロ転がつて壁にぶち当たり、きゅう、と田を回すエリスから、そつと田を逸した。

あつれ、またもや失敗じゃね自分。

自分内エリス負債が増量中な今日この頃、いかがお過いりでじょう・・。

「・・・相変わらず過ぎて色々言いたかつたのがどうでも良くなつ

たんだが」

一連のドタバタを静かに観察していたエイジが、眉間につまみながら苦い顔。

ああ、そりこやエイジ回収に来たんだつたよね、すっかり忘れてたや。

「えーと。 お久しぶりエイジ。 色々すっ飛ばすけど無事で何よ

り」

さつきはお疲れ様、と、右手を差し出してみる。

「ああ、お久しぶり。 訳のわからない状況なのを無事と呼んでいいかは別として、さつきは助かった、ありがとう」「

山向こう確認してきたけど、綺麗サッパリだつたね、あれどうやつたの？ と差し出した右手をがつしり握りシェイクハンド。

シェイクシェイク、ちょ、振りすぎらめえバターになつちやう。

「・・・いろいろ相変わらずで安心した。 ジオもエリスも変わりないようでちよつと安心したよ」

僕らの他にもまだこっちに来ちゃつた人とか居るのかね、と、心配げに首を傾げるエイジ。

「うん、同士エイジも相変わらずそうで安心だ」

特に周囲への心配つぶりとか、実は負けず嫌いで今まで握手が握力比べに移行しつつある辺りとかも。 だが自分とて負けぬ、ふんぬぬぬ・・。

「おーいエロゲーマーズどもー。背後でエリス嬢が一人の硬すぎ  
る握手でフヒっていますが良いのですかー？」

足音を消して部屋から出てきたジオに指摘され、エイジと一人、転  
がっていたエリスをチェック。

ふむ？

取り立てて変なところはない・・・。

いや、よくよく見ると、口元に拭つた後・・・？

「ジオさん、私はもう腐趣味からは卒業しましたよー、ヤダなモ  
ウー」

にこやかに立ち上がり、バンバンとジオの背中を叩くエリス。  
・・・いや待て、それは無理がありすぎる。

あ。

まさかこいつ、エイジの前だからって猫被つていい子ちゃんで通そ  
うとしてるのか！

「あはははー、何メリウさん、やだなあ、なに私を見つめてー」  
込められた眼力で「協力求む」と脅迫してくるエリスに。  
小さく頷く自分。

「途端に動きが胡散臭い気がするけど？」

バツサリ切り捨てるエイジ。

ああうん、どこをどう見ても不審人物の拳動だよね。

今から、コレを、騙せるのか・・・？

「エイジに疑われる現状を打破するぞエリス！　自分が今から質  
問を出す、それに答えていくんだ！」  
仕方ないので勢いで押し流そう、うん。

「はい、ばつちこーい！」

よし、エリスもノッてきた。

相変わらずの芸人体質に、ああ、もう駄目じゃね、といつ氣分がないでもないが。

「よし、いい返事だ。では第一質問。半ズボンの男の子にトキメキを感じる？」

「はい！・・・ゲフゲフ、いいえ！断じていいえ！可愛い男の子とか母性愛的に和みますよね！という意味で、はい、です」

・・・限りなくアウトに近いチエングジ。つてか貴様、腐った上にショタコンだと・・・つ

「・・・第一質問、着崩したワイシャツに興奮する？」

「しまつ・・・げふふん、嫌だなあ、だらしないー、そんなの見たら直してあげちゃいますねー」

もうダメだつ・・・だけど勢いで流すしかないつ・・・つてか怖くてエイジの顔色みれねえ。

「第三質問、懐かしアニメT&B主人公コンビ、どっちが攻め？」

「ウサギちゃんの背伸びした息子攻めのオジサンの父性受けに決まつているだろ常考・・・うげほつ、た、たまにはお姫様抱っこでウサギちゃんを受け止めて助けてもいいと思うんだ私！」

限りなく酷かつたがなんとかもちなお・・・したのかコレ？つてか、一問目すでに詰んでいたがな。

「一つ、質問してもいいかな？」

顔を伏せ気味にしているエイジから、ポソリと声が漏れた。

ウヘエ超こええ。

「はい、な、なんでもこーい！」

エリスさんたら超怯えてるー、へいへい、バッタービビッてるー。  
さて、同士エイジはどうトドメを刺す気だ・・・。

「質問。攻めの対義語は?」

「受け!!」

守りー、守りー！

このバカ・・・なんという王道に引っかかりやがる・・・オワタ。  
つてかエイジめ、三問田の攻め受けの流れで潰しに来たか、やるな  
つ。

「・・・しかも何が間違ってるのかわからない・・・と言つか、正  
解でしょ、と胸を張るエリス嬢が痛ましい」  
ジオが天を仰ぎ見て。

数分後、村の周囲を男三人で掃除する傍ら。  
村の入口に正座させられ続けるエリスの姿があつたという。

ひとまずの脅威は去った、と見ていいだろ。う。  
村の人々に惜しまれつつ自分達に合流したエイジを伴つて、一路四  
人は首都という名の町を目指す。  
あつちにいたら、一応この村への兵備派遣をお願いしとかないと  
ねえ。

そん首都への帰り道。

飛んでいいのだけどね・・・今の面子、エリス以外は飛べ  
るという現実。

「来た時と同じように誰かがオンブしてくれれば楽じやないです  
一、歩くのヤダー」

長時間の正座で膝に来ているエリス。

いや、歩きになつたの、君への罰ゲームらしいので。

「若いうちは歩いておきなさい、元の世界に戻つたら意味はないかもしけませんが・・・習慣付けておけば悪いことはありませんからね」

仕事につけば途端に歩かなくなりますよははは、と、ジオが笑う。

「ああ、確かにね。僕は学校の階段なんかを毎日登り降りだから案外歩けてるんだけどね・・・ほらほら、君は若いんだからもつとシャツキリする！」

リアルが学校教諭のエイジが、だけど外の人の体力を持つて帰りたいねえ、なんてこぼしながらプルプル歩くエリスを応援する。ビタイチ物理的には助けないけど。

「えりす、しつてるか・・・マジで歩かなくなると、足腰が弱る」もう本気で外の人持つて帰りたい。

痛みのない健常を超えた体が欲しいー、と、妖怪人間チックに叫ぶ自分。

そんな年寄り連中三人の体力談義に、エリスは「私も、ああなるんだろうかー」と、将来の健康事情に不安を感じている様子で。

「・・・がんばれ」

色々と、と、呟いているエリスの姿に、自分は小さく笑つて。

「がんばれ」

自分にしか聞こえぬ声で、ホールを送つた。

合体そして出来ちゃった？

題名でエロい妄想した人は、時計の分数回腹筋な。

のんびりのんびり徒步の道行き日も暮れて。（村到着（夕刻）  
魔物討伐（同左） バカ死亡（同左） 行き帰り玉瀆しエクソ  
シスト 一晩明けて 掃除とか（夕方まで） イマコロ、な  
時間経過である）

夕闇染まる平野の景を郷愁混じりに見て和み。  
さて、このまま飛んでいくのも無粋極まりなしつて感じだし、ここ  
らで野喰しようかと、他三名に声をかけてみた。

「ほいほい、それも中々オツですね  
結構ノリ良くてジオが応じてくる。  
あー、キャンプとか好きだったもんね確か。

「やつたー、ようやく休めるー！」

エリスが大喜びで地べたに大の字・・・おいい、もつちよつとぢう  
にか・・・まあいいか。

今まで休憩なしで歩きづめだつたしねえ、色々設喰はやつとくから  
そこで休んでなー。

「別段急ぐ旅でなし、か」

出来れば村に兵士何人か寄越して欲しかつたけど、と、心配性のエ  
イジが苦笑いする。

そして、足元に寝転ぶエリスを見て苦笑いが深くなつたりする。

「んじや、サクッとテント・結界・食事準備しちゃうわさー  
手伝つよ、というエイジとジオを制して。

血の池トラウマのお詫びに、と、大人げなく色々駆使する自分。テントと簡易キッチンをゾルゾルと袋から取り出して即時設置、及びその周囲に結構な威力で魔法壁貼つてつと。ハイ完成。

「夕食出来るまでのんびりしててー」  
キャンプといえばあれ、な、カレーでも作ろうと思つ。  
「メ・・・メがつ・・・欲しいつ・・・  
けど悔しい、無いからナンにしちゃうー

「ほいほい、では手が足りなかつたら声かけてくだされー」  
即時靴を脱いでテント内に移動するジオ。  
設置したテントが、魔族（仮）さん達との遭遇時にレシピに落としたものだつたので、その広いこと。  
・・・だからと言つてロンダートからの月面宙返りとかしないでください縊るぞ糞坊主。

「ほら、エリス。 寝るならテントの方にしなさい」  
地面上に大の字な、たれエリスさん。  
エイジに連れられテント上。

いやあ、正直助かるわ・・・地味に彼女がフリーダムなので。  
「あーーー、あ、ちょ、襟首掴んで持つて行かないテー・・・あー、  
楽だからいいかあ・・・」  
すっかり休憩モードのエリスが、すでにダメ人間になつていた。  
でもまあ、大いに働いてもらつたし大目に見るべきか。  
さてさて、んではちやつちやと飯作りますかねえ。

肉々しいベヒモス肉カレーを胃に収めた四人は、ひとまず会員流後の  
お楽しみ。

情報交換と相成るわけで。

カクカクシカジカー、マルマルウマウマアー。

「と、言つ訳で、このく英雄様を売り渡せば、自分達は一生樂して生きて行けることと相成ったわけだ」

ひとまず嘘は言つてない感じにエイジに情報を流してみる。

「ははは、ぶっちゃけ売り渡してもこちらに来るリターン低そうだけどねえ、国力的に」「ですよねー、と素で納得する自分。

「で、ウチが売り渡されるのが既定路線っぽく聞こえますけど、そこら辺どうよ?」

ジオはすっかり酔っ払って横になりつつ、適当な文句を言つてくる。

「「え?」

真顔で驚いてみせるエイジと自分。

「え?」

ちよいと顔が固まるジオ。

なんとも微妙に空間が凝固する中響く寝息。

「ニニニニニニ

静かだと思ったら、痴口リンはすっかり寝入つていたりした。  
寝る子は育つ。

・・・本当に?

「ふむ、んじゃそろそろ眞面目にいきますか」

丁度エリスも寝てるようだし、と、彼女と少々距離を取り。ん?、と、自分の態度に違和感をもったのか、エイジとジオがこちらへとやって来る。

うん、呼ぼうと思つてたから手間が省ける。

野郎三人、面突き合わせ。

ひとまず口火を、自分が切つた。

「さてさて、ひとまず。弱音でも吐こうか。自分ら、元いた場所に帰れると思うかい?」

無限袋の中から一升瓶を取り出して、キューっと行きつつ、友人一人に問い合わせた。

無論、答えなど決まつているが。

「分からぬ、だね。なんにせよ情報もない、状況が理解出来ない、そもそも元いた場所さえ本当にあつたのかと疑い始める始末だよ、僕は」

一息にそつ言つと、自分の差し出した瓶を搔つ攫い乱暴に喉へ中身を流しこむ。

ゴクゴクゴクゴポオ。

げほげほつ。

エイジ、慌てすぎ。

ひとまず言おう、落ち着け。

「平氣ですか、エイジさんや?」

咳き込むエイジの背中をさすりつつ、ジオが雑巾で飛び散ったブツを拭きとつた。

涙目で謝るエイジに、気にせずに、と手を振つて、瓶を片手に元いた位置に寝そべるジオ。

そのまま瓶の中身を一口あおり。

「今現在分かつて いる繋がりつぽいのが、死んだら元の場所に戻る、というメリウ臨死情報だけですしね」  
しかも体は動かない、しかし周囲は見渡せる、なんて状況なんでしたっけ、と、瓶をこちらに寄越しつつ言つジオ。  
それを受け取り、キューっと、じっくん。

「そ うなんだよねえ。すわ、魂状態？的な視点だったのかなあ、と、振り返つてみると思つたりしてる」

時の止まつたようなモノクロの世界、明かりもないようなはずの密室を見通す目なんて、中の人的自分は持つていなければ。あとは、もしかしたら自分以外にも死んでたら、あそこで鉢合わせになつたのかなあ、なんて思うけど。

「流石に、ジオと一緒に死んで確かめてくる、なんて言えないしねえ」

「蘇生」使い一人が手に手を取つて退場なんて、正直田も当てられない。

かと言つて、あの時一緒にいた残り一人と出会つたとして「やあ貴様等、どちらかもしくは両方、試しに死ない？」とは言つたくな  
い。

「現状だと、本当に今を生きる、しか無いね」

咳き込みから回復したエイジが、自分の手渡した瓶を口にし、静かに傾けた。

今度はゆっくりと、飲み込めたようだ。

「ひとまずは他に迷い込んでる連中がいかがうかの探索重視で  
行く、程度ですかね」

残り少なになつた瓶の中身を一気に飲み干すと、ジオはムクリと上

半身を起こして胡坐をかいた。

空瓶がこちらに転がってきたのを、ぬるりと袋に詰め込む。

「んじゃ、『一升』で弱音さん終了ということだ。ひき続いて、なにか気づいたこととかあつたらどうぞ」  
どんな事でもいいんで話していこうか、と、自分は新しく中身の詰まつた一升瓶を取り出して開栓。

寝くたれる痴口リンを少し遠間に、野郎三人のブレーンストーミングじみた一升瓶バトンリレーが、続いた。

「で、大学時代に口トの紋章流行りさせようとして研究室に全巻寄付したんだよ」  
チチ流行で終わつたけどねえ、と、語る自分。  
色々と話しているうちにどうでもいいような方向へと流れた野郎飲み会、現在の議題は昔流行つた漫画。

「口ト紋いいよね。僕も全巻持つてました」  
青年誌つぽいのでやつてた続きのやつは読んでもないんだけどね、  
とエイジ。

「実際問題、アレヒダイ大は鉄板でしたな」  
ドラクエ世代的に、ヒジオ。  
確かにねえ、同意。

「そういうや、その両方共合体魔法あつたねえ」  
未だにバギラの衝撃が忘れられない。

「あつたあつた。メドローアとか強すぎないか、と、当時の少年時代な僕も流石に突っ込まざるを得なかつた」  
そんなことを言つエイジに「つてかいつも突っ込んでばかりじゃねえか同士は」とツッコんでみる。

「ツッコみにツッコむ・・・でゅふふ」

!?

なにか不穏な戯言が聞こえたが・・・ん、寝てるな、呼吸からすると。

ふう、野郎どものバカ話で起こしてしまつたら申し訳ないな的に思つてたので、ひとまず胸を撫で下ろす。

「で、今ふと思つたが。できないかね、合体魔法」  
例えはこんな感じでー、と、自分は何気なく左右の掌に別々の魔法を思い浮かべて発動させてみる。

右の「全究回復」、左の「白銀癒手」。

ボウ、ボウ、と、淡い光を湛えて現れる、それぞれの魔法。

「・・・!?

なん・・・だと・・・と、三人が固まつた。  
出でる・・・出でるぞ・・・?

驚きに目を丸くした周囲及び自分。

OKOK、落ち着け落ち着け。

深呼吸ー、吸つてー、吸つてー、吸う。

よし、肺がはちきれそう。

「勢いで行つてしまえ合体!」

別々の魔法が載つた掌を、ヤケ気味に叩きつけ。  
力任せに押し付けて、握りつぶす。

合わせた掌の内側から、覚えなき手応えが帰ってきた。

自分はそっと、掌を開く。

瞬間的に広がり、テント内に降り注ぐ、白銀色の雨。

「「おおっ」」と、一人が驚きを露わにし。

外の人補正でいろんなモノの見えるようになつた素敵自分アイが捉えたその光の雨粒は。

極小の、手のような造形を、していた。

まさかの合体魔法、できちやつた・・・?

## 発覚それは限定解除

光の雨に打たれつつ、気持ちの悪い語尾マークに「シネ」「シネ」と大絶賛を受けても自分は元気です。洒落でやつたら出来ちゃった、という笑えるようなそりでないような状況である。

「できた、ねえ・・・」

エイジが半笑いでこちらに視線を投げてくる。  
ういー、と、こちらも半笑いで肩をすくめてみたりする。

「どういうカラクリなんですかねえ、」これは早速ジオも同じように試し、再び降り注ぐ当たり判定・・・とか押し判定・・・付き光の雨。  
ふむ、自分だけのユニークスキルでなくて一安心。

「んー、色々試すしかないかね」

幾つか仮説は思いつくけど、と言いつつ。

もう一つ思いついたのを実行してみんとする。

着想は合体魔法と同じく漫画。

使つのはオリジナルの様に5つでなく3つ、更には種類の違う感じで。

く全究回復くと、右手親指に光を灯し。  
く白銀癒手くと、右手人差し指に光を灯し。  
く浄化くと、右手中指に光を灯し。

「合体」

三つ指のロボットアームの如く、光灯す三点を、合体。

僅かずつ色の違う白光が、ピッと弾いた三本指を鐸とする剣になる。おおお、といつ、エイジ、ジオの驚きをBGMに、自分は光の剣を真一文字に振り抜いた。

かすかな風切り音と共に振り抜かれたその剣の軌跡を追いつゝ、光の雨が乱れ飛んだ。

「今のところ、だけだ。属性合わせたせいか反発もなさそうだね」神様との交信がなくなつた、というルールの喪失を穴埋めるかの「」とく。

同時に魔法は使えない、と言つるルールも喪失している、と見るべきか。

「ルールの不在、とするなり。魔法だけじゃないのかも、ね」言つなり抜刀し、エイジが中空を斬りつけた・・・気がした。しかも、複数回。

鎧鳴りの音だけが小さくチン、と、微かな残響を残す。

「エイジ、今のは？」

ジオが眉根を潜めて尋ねる。

彼が何をしたか、知覚出来なかつたのかもしれない。かくいう自分も、なんとなく、でしか分からなかつたので大きなことも言えないが。でも、恐らくは・・・

「うん、やつぱり、使えた。連撃と、先の先の同時使用」ゲームでは併用不可能だつた技の合成が、あつさりと実現。エイジが満足気に頷いている。

「流派技能もそう、か。となると、後は生産とかその他技能なん

かか・・・

何か混ざりそうなものあるかなあ、と考えるが、別にマクソンしながら薬作つたりするとかに優位性は見当たらないしなあ・・・。あーでもない、こーでもない。

野郎三人なのに姦しく実験を行つ傍らで。

「・・・私をノケモノにして酒飲んで盛り上がりつての駄目大人たちがあるわ・・・」

体育座りの半眼状態でこちらを嫉む、エリスの姿があつたりした。

「ゴメン。起こしちゃつたか

謝る自分に、エリスの半眼状態は動かず。

「まだ寝ていいよ？ 僕達が五月蠅いようなら黙るから・・・と言つより、もう休むから

それでいいよね、と、自分とジオに田配せするエイジ。自分とジオは黙つて首肯。

実験はまた後日でいいしね。

「あ、結界は張つてあるけど一応自分が夜番に立つよ  
そう言い残しテント外に出る自分。

外の人の高性能さで三徹夜位なら我慢できる」とはすでに実験済みよつ・・・。

「あ、ちゅ・・・言い出したら聞かねつにありませんな。では、

お言葉に甘えます」

聞き分けよぐジオがそう言つてくれる。  
変に粘られても双方面倒なだけなので正直助かる。

「辛かつたらいつでも交代するから声かけるんだよ」エイジも自分のワガママを優先させてくれたようでありがとう同士。

「うー、地味に目が冴えて寝付けないのですが」なのでお酒ブリーズー、と、まダオ（まるでダメなオンナ）化したエリスの声に「エリス今何歳だい?」「15さいー」「うん、正座」という一連のお約束が展開され。

三人の寝息が聞こえてくるまで、そう長くはかからなかつた。

さて、余程のことがなければ張った結界でどうにでもなるはずなので。

自分は一人、外で一人酒をチビリとやりつつ。現状について、考えを巡らせる。

体は昔のゲームで操っていたキャラクター。心はそこら辺のオッサンな自分、ただし外の人補正があり精神的にタフ。

・・・と言つより、現在の状態を言い表すならば。

「外の人の性格に、引っ張られているって感じ、なのかも」今間借りしているこの体に、自分以外の明確な意志が宿つているのではないか、と思うことがいくども、あつた。

声が聞こえてくるわけでもないが、体がそう言つている、と感じることが、ままあつた。

もしかしたら。

どうにかして、外の人の心と意思疎通できるのではなかろうか?

「メリウセーん、起きていたらお返事ください」

外の人に向かつて中の人が声をかけてみる。

・・・返答は、ない。

そんなものか、と、サクッと諦める。

では、次。

外の人を纏つて放り出されたこの世界、地理や歴史、人や言葉などにより、ゲーム世界に酷似した1000年後の世界、という事らしい。

石造りのアジトは崩壊し、基礎だけを残した感だったのに対し、地下部分の掘りぬき空洞は年月の経過を余り感じぬ風情であった。また、〈塔〉・・・今の〈世界樹〉付近の鉱脈が、ほぼ手付かずで残っていた辺りも見逃せない。

地上の建物と、地下の状態がチグハグな印象がある。  
「」へんは情報が少なくてなんとも言えないところである。

悩んでも答えが出なさうなので、更に次。

国の単位が矮小化している件。

単純に人口が激減している、と見るべきか。

まだ世界を見て回ったわけではないので結論は出ない事柄であるが。そして、重要な事柄が、一つ。

今まで出会った人々に、魔力をまるで感じない、という点。  
ゲーム世界であつたなら、潜在的な魔力持ちNPCなんていうのもたくさん居た。

少なくとも自分達の魔力視界で見抜けぬ魔力隠形の使い手が居るとは考えにくい。

そんな使い手が居るなら、小鬼さんやらに苦戦するいわれはないだろうしワンドラングモンスターのベヒモスにも対抗手段くらいは持つていそうである。

しかし小鬼相手に死人が出かけ、ベヒモスに対しては逃げ回る術しか持たなかつた現状を鑑みるに。

人類は衰退している。

「今更なんだけど、自分達ってかなりの薬薬だなあ」  
正直、世界に巢食う魔王のうち何体かは、自分達が駆逐できてしま  
う。

魔王く病魔く飢餓く死く。

「」らへんは、正直なんとでもなつてしまつ。  
試してはいなが、人の墓を暴いて骨でも持つてきて復元してから  
'蘇生'は可能であるう。

く淨化くにて病魔は失せ、外の人の技術と知識により飢餓もなんと  
かなる・・・と思われる。

「ど」まで好き勝手していいのやら、ね。 現状でも結構酷いもん

だけど」

きゅーっと、喉に酒を流しこんで。  
自分はホウっと息をついた。

まだ朝は遠そうだ。

現状がどうであらうが。  
自分がどう思おうが。  
誰がどう過いそうが。

それでも世界は回つてゐる。

「とか何とか言いながら、あーやー」

長い長い夜の番。

途中から警戒するのも億劫になつて、無限水筒の水で延々と酒を量産していた自分がいる。

なんか変な感じで脳内スイッチが入つたのか、もしくはお円さんがキレイだつたからか。

〈神話級〉が六本も出来ちゃつた。

うち五本はもうないのだが。

「なん・・・だと・・・」

モソモソ起きてきてラジオ体操始めたエリスに朝の挨拶がてりにそのことを伝えたら、即時〇〇〇姿勢されたよー 不思議！

「いや、飲み過ぎだらう常識的に考えて、  
あとおはよう、と、エイジも起床のご様子。

おはようエイジ。

あれ、ジオはまだかい？

「あー、まだ寝ていた・・・と思つ」

自分の問いかけに言葉を濁すエイジ。

んん？ またあの坊さん愉快な寝相でもしてゐのかいなー・・・。

ペラリとテントの入り口を、めくつて中を覗いてみたならば。  
生きてるのか死んでるのか、パツと見分からぬ呼吸の浅さ。  
即身仏かコレ、といつ佇まいの。

「なんで結跏趺坐よ・・・？」

姿勢よくアッパー座禅組んでるジオの姿。

寝るついでで悟りでも開くのか、ジオさんや？  
だが、もう既起きたんだし、貴様も起きねばね？

自分はく悪魔へに変身するジオの背後に回る。

そして体を捻ると、一気にそれを開放、巨大な質量をジオの側頭部  
に打ち付ける。

「おっはにゅー！ チネエクソ坊主！」

ブルルン、と唸りを上げる大きなおムネ。

しつかり足腰踏ん張らねばよろめいてしまいそうな勢いを乗せ、乳  
ビンタが炸裂だ。

脂肪分の柔らかさで外傷を負わせず、頭蓋の中身に重さを徹すガチ  
技なのは秘密だ。

着弾、いい手応え・・・いや、胸応え？

意味なく叫んでみるか、おっぱ応〜。

「だがウチには無意味。 カウンターの応用で重さを貴様に返すぜ  
！」

なん・・・だと・・・。

つてか、ジオ、いつの間に目覚めてやがった・・・！？

打撃をそのまま打ち返されて立板のように潰れていくオッパオの痛  
みを驚愕で塗りつぶし、自分は即時変身を解いた。

巨大突起物が消え、打ち込んだ衝撃が胸の前を行き過ぎる。  
ブワッと衝撃波がテントを内側から打撃し、全体を派手に揺らした。  
なんて、威力だ・・・。

「殺す気か！」

「お前が言つたな！」

ですよねー。

「「ヒ、リ」までテンプレー」

早朝漫才をしてしまつた。

外の一人の、うわあ、という顔が、しばらく忘れられやうにない。

簡単な朝食をでつち上げ（干しトマト使つてミネストローネ作つたら不評だつた。美味しいらしいけど、その、見た目が、ね？と思ひ出しちゃうらじへて、ね？ 正直スマンかつた）、残せせるのもモッタイナイので、なんとか強引に胃の腑に收めさせる。ご馳走様でした。

「「「ヒ」ちそつさま・・・「ポポオ」」  
なにかこみ上げてきている三名を、ひとまずは安静に放置。  
テントなどを片付つて、赤いスープ系は・・・しばし自重しよつと思つた。

そんなこんなで出発。

三人ともすでに通常状態に復帰。

流石である。

「なんだかんだで昼過ぎくらいには首都といつか町に戻れそつかな  
來たときは飛んできたし、結構距離感が曖昧である。  
程々早いペースで踏破していると思うんだが。

「ふーふー、飛べばいいじゃんー。いいじゃんー。そしてのせてけー」

アヒル口になつて抗議してくる痴口リン。

あつれ、昨日、色々ガンバロウとか言つてなかつたつけ？

「ううう、聞こえましたか・・・あの、ナシ、というわけには?」  
気まずそうに聞いてくるエリスに、自分は満面の笑顔で答える。

「口だけの奴に飲ますコレは無いなあ」

言いつつ袋から、今朝方出来たトツテオキのく神話級を取り出す自分。

キラリとエリスの目が光つたのが、見えた氣もしたが無視した。

「・・・頑張つたら、飲めたりしますか?」  
目だけ爛々と輝かせて聞いてくるエリスに、

「無論。自分はく頑張つた奴は報われるべきだ派」だ  
酒瓶をしまい、嫌な笑顔で応じる自分。

どう見ても詐欺師の顔に見えた、とはエイジとジオの談。  
いや、騙さないよ? 頑張つて歩いたらあげるよ? むしろ先渡し  
でもいいのよ?

「いい。町まで歩く。そしてメリツさんに風呂を作らせて汗流して。  
そののち美味しく頂くことを宣言する!」

鼻息荒く早足になるエリス。

先頭にたつと自分達を置いていく勢いで競歩競歩。

あと、知らない間に条件追加されてるけど風呂はアラム缶風呂でも  
いいのかね?

「ダメ極まりない教育のモデルケースを見た気がする

アメが甘すぎる、と、エイジがボソッと呟き。

「未成年を釣るのに酒出すメリウへの説教は・・・町に行ってからですかねえ?」

ねえ? と、エイジとつなづき合づジオ。

「・・・  
伝説級>三本くらいで手を打たない?」

自分はダメ元で買収を試みた。

「「「」」

声を揃えて、拒否された。

拳句、即買収とか保護者的立場としてどうよ、とか。  
延々と説教喰らうハメになつたのは・・・蛇足。

いきなりトップスピードで早足したエリスがヘバッて、後続の一位  
集団に飲み込まれるのは20分後であった、というのも蛇足。

ベヒモスに踏み荒らされた町の復旧工事真っ最中に、自分達は戻つ  
てきた。

瓦礫を担いで集積場所に積み上げていたモノさんに即時見つかり、  
自分達四人はノナさんの元へと連行される運びとなつた。

で、色々話してエイジも紹介。

彼への感謝と共に、守っていた村への兵員即時派遣を行うモノさん。  
また、一応魔物の集団を掃討してきた事も伝え、今後の警戒の糧に  
でもしてもらうこととした。

たまたまノナさんへ報告しに来てた見知らぬ騎士が「そんな大群居  
るわけない嘘つくな」とか言い出すので、耳引つ張つて外に釣れだ  
した拳句に「禁じ手」で喰らつた魔物集団の装備の山を袋から排出  
しきつてその騎士を埋めたりもした。

重量で死なないよつに空間残す感じでパズル的に組み上げたので、頑張れば今日中に脱出できると思う。頑張らないと死んでも出れんが。

「ただいまー、何あの小僧?」

ストレートにモノさんに尋ねてみた。

「申し訳ありません。先週入団したばかりの見習いでして」剣の腕がそれなりなので、それを鼻にかけていまして・・・など、実にわかりやすい説明を頂いた。

「チャンバラしたくて入団したら避難誘導だの報告の使い走りでブリたれた、と」

なんてよくいるキャラクター・・・。自分がちょっと感動しているその横で。

「でも、いきなり魔物の装備で出来たパズル迷宮に閉じ込められるというよく居ないキャラになつたようだけど・・・」

「相変わらず気に入らない相手への沸点が低いですなあメリウは・・・」

「分かります分かります、ボクも最初いけ好かない爺とか呼ばれました」

「敵意とかを直接反射してしまつ感じですかね」

「私気づいた。ノナさんとサブリーダーの一人称が被つてゐ件について」

自分の性格診断会議及び、我が道を往くエリスさん素敵！な空間が発生していた。

「・・・」

自分は、ちょっと無表情に、そちらをじーっと見つめてみた。

じーっと。  
じー。

視線の先、性格診断してた皆が、何故か我先にと、逃げ出した。

「え、あれ？ みんなどうしたんだろ？」

きょとん、とその場に残るエリスの頭を無表情に撫で付けて。

「一段落ついたっぽいからエリスへの『褒美タイム』と行こうか」  
ほいよ、と、酒瓶一本手渡して。

自分はひとまず、風呂でも作らうと思つ。

## 採掘それは暴走で

首都から少し離れた場所に、採掘場を作りました。

自分一人じゃないのが今回の強みよ、とばかりに同士エイジと共に地下迷宮作成に余念がない今日この頃。

あまり掘りすぎると地獄につながっちゃうかなあ、などと出来もない妄想をしつつ。

今日も今日とて、掘れ、ほれ、ホレい。

「久々にマイインクラフトやつてる気分だなあ」

この世界でもブロック単位で掘れたらいいのになあ、と現実逃避しつつ。

ガツツンガツツンガツツンでガツツン。

おおつとミスリル発見・・・こつちはなんと・・・ボーキサイト・・?

灰剣士辺りが居たら夢のアルミニウムが我が手に?  
超ジユラルミンとか超々ジユラルミンとかが、我が手に?

ふおおー、漲つてきたアーーー!

「狭いので騒がないで下さい」

何故か敬語のエイジがとても怖かったので即時黙りました。

でもなあ、同士ならわかつてくれると思うけど・・・

「ん? 節操無い地層だね?」

キヨトンとした顔で無限袋に文字通りの玉石混交放りこみつつ首をかしげたエイジ。

そうじやねえよ!

そうじやないんだよエイジさんつてば。

ファンタジーな住人にジュラルミンの盾渡して驚かれたりとかした

くないもんかね！？

「いや、全然」

どつでもいいが手は動かしてくれ、とばかりに作業に没頭するハイジ。

ああ、そういう奴でした・・・。

クールに仕事するジョントルメン、それがエイジといつ男でした。仕方なし、自分も真面目に無口に働きますか変身く人間→スタイルツュ脱衣おっぱいふるんふるーん。

さあてツルハシツルハシツル。

カツーンカツーンおおつとアダマンタイト。

掘削孔の中は蒸し暑くてイカンね。

「・・・田のやり場に困るんだが？」

とか言いつつ超ガン見してくるエイジさん。

ああ、そういう奴でした・・・。

見たいものは見たい、下らぬ誤魔化しなじはせぬのだ！ と言つ紳士が、エイジという漢であつたわ。

奥さんに殺されればいいと思うがいかがか？

あと無事に帰れたら娘さんにチク「ヤメテ！」あによ解、今回は見逃してやう。

「ハメられた・・・」

肩を落として作業に戻る漢。

ククク、どうよ、ちょっとは漲つたろう？

「中身が同士なのわかつても襲いかかりたくなりました、まる

しゃないよねえ、ソロラはー。」

だつてほら、おいやんらおじちゃんだし。

その、なんだ、ねえ？

「「性欲を持て余す」」  
ですよねー。

自分はエリス拾っちゃったんで中々発散出来なかつたんだけど、エイジの旦那はどうだつたよ？ とか聞いてみた。

「あー、僕は案外暇あつたから」

村守るのも不眠不休、じゃなかつたからねえ、と続けるエイジ。

「でも、見張り交代程度で実質単騎の村防衛だつたんだろ？」  
頑張つたなあ、正直村の超恩人つて感じだし、若い娘さんとかが宿に押しかけてきやーエイジさん抱いてーとか無かつたのかいホレホレ吐いちまえようー、とか馬鹿話が花咲ぐ。

二人して、手は休めず。  
カツンカツンと掘り続け。

ふと背後を見れば、出口から差す日の色はすでに燃えるようなオレンジで。

二人同時に突き刺すピッケル、ピタリと止まる動作もシンクロ。

「「帰ろうか」」

ハモつておつかれ手を叩き。

自分とエイジは、帰路についた。

・・・変身解ぐのと服着るの忘れてて、ちょっと町の青少年とかを

前かがみにさせてしまつたのは、蛇足。

敗因はエイジも感覚が麻痺していたこと・・・。

単純作業は心が死ぬね？

おつかれさまー、と出迎えてくれたエリスに一人して手を振り。

自分達は食肉さんに踏み荒らされて適当に整地されてしまった旧貧民住宅街、現資材置き場にやってきた。

さあて今日一日の自分と同士の採掘力が白田・・・田が暮れてるから橙日とでも言つのかね・・・に晒される。

無限袋を逆さに、だばあ。

まずは石材・・・粘土・・・銅・・・鉄。

周囲にいた住人や騎士達がそれを見てギョッとしているのが分かるが、

「手品でーす」

と、白々しく言い放つて二二二二二してたらなんか拍手された。エイジの、なにか諦めたような半笑いがちょいと気になつたが貴様も道連れだからね、この見世物状態。

よーし、皆の視線を集めだし、二二二で変身してドッカンドッカンとウケを・・・。

「猥體物陳列すんなよ?」

ガツと後頭部掴まれて注意を受けた、チツ。

「ノリだけで色々すんな、な? つと、僕達頑張りすぎたんじゃないかね、これ」

説教しつつ前に視線を戻して軽く引いた声を出すエイジに、

「ん、なにがうおわあ!?」

自分も袋の吐瀉物を確認し、驚愕する。  
なんというか、食肉さんくらい、有りそ娘娘んですけど。  
そして、まだ、袋の中身、あります・・・。

自分は静かに、袋の口を、閉めた。

広い湯船で手足を伸ばし、ゆづくじと息を吐き出していく。

ああああ、生き返るわー。

「今日はお疲れ様でした、見てきましたよ何ですかあの石山?」

半身浴中のジオが呆れ半分で聞いてくる。

いや、ちょっと暴走しちゃってねー、ハイジが。

「メリッさんもかなり狂った量掘つたじやないか」

僕だけのせいじゃないからねアレ、と、頭を石鹼で泡立てていたハイジが反論していく。

共同浴場。

ひとまずエリスへの御褒美（といづ名の強制労働）で作った風呂を改装、増築してごらんの有様だよ！

大人10人程が一気に浸かれる浴槽と同数が使用できる洗い場を完備。

燃料は薪。（廃材が溢れているため）

一時期「爆炎壁」を永久化して熱源にしようとも思つたが、インフラ整備にいちいち永久化魔法なんて使ってたら自分が死ぬ。そんなこんなで、普通の薪風呂が出来たわけだ・・・レシピのお陰で、2つ。

熱源の有効利用のため隣り合つた施設になるけど、そりが辺は今後運用考えて下さい。

・・・と、モノさんあたりに案件は投げである。

水源は現状上水道の水をそのまま引いてきている。

案外水量豊富なのが助かる。

クーティー起きなかつたらこの風呂に使つた水代で百人単位の食費が貰えたというから・・・風呂の文化は育たないわなあ、そりや。ノナさんとエリスの姦しおにやのこトークで「お風呂? 水浴びのことですか?」「〇ヒ」というやり取りがなされた、ということのはさつき聞いた。

無言でノナさんの襟首掘んで風呂直行したといつエリスの満足気な顔といったら。

「さて、材料はアレで足りると思つて。明日からはこよいよシムシティだね」  
ザブツと湯船に肩まで浸かつたエイジが、深くため息をつきつづつ言つた。

「そだね、どんのにじようか。水道用ポンプ設置とか面倒だし、平屋かね?」  
石造りだと漆喰で固めるんだっけ? とか家談義になつたり。焼けると脆くなるんだっけ・・・んじやレンガ焼いて・・・いつそ木造といつのも・・・云々カカンヌン。

「お一人とも、ノボせますぞー」  
早くも上がり支度のジオの声に、自分とエイジの目が醒める。  
ああ、サンクス坊さん。

「僕らも上がりつか  
「そだね」  
んじや、キュウヒと一杯やりながら。  
明日の建築計画でも練りますかあ。

建築そー」は食肉さんが踏んでも大丈夫（前書き）

俺、三部作書き終わつたら魔王ローキックと勇者ヘッドロックの話  
書くんだ・・・ロフツ

## 建築そこは食肉さんが踏んでも大丈夫

暴君による圧政を神の御加護（祈りの言葉は「イキロ！」）の後押しで跳ね除け、自由への第一歩を踏み出したこの町。

喜びに沸く住人達に浴びせられる現実という名の冷や水。天災の如き巨大な魔物の挾撃に遭つてしましました。

もうここまでか、と皆に諦めが漂つたその時。力力カツと現れた謎の救い主達が、訳も分からず逃げ回る住人達をあつさりと助けてくれたのでした。

しかし、残されたのは無残に踏み荒らされた町。

せつかくの明るい未来を夢見た高揚はどこへやら。

一転、町は、住む場所を失つた人で溢れかえつてしまつことに。

そんな状況を見るに見かね、二人の匠が立ち上がりました。目を覆いたくなるこの焼野原じみたこの光景が、いったいどんな復活を遂げるのでしょうか…。

「で、どうする？ 塔作つて油圧エレベーターとかつけちゃおうか？」

「バイオスファイアを地下に造つて有事に備えるとかどうだう？ 現実では失敗したらしいねあれ」

自分とエイジの明るい都市計画は、酒も入つて愉快な感じに纏まりを見出せないでいたが酔つ払いだから気づかない。

「あああ、ダメな大人がまた飲んでる私も混ぜてー」

風呂上がりのエリスがすさまじい勢いの踏足で滑るように酒瓶をかっさらつていく。

だが惜しいな、それはもうカラだ。

「エリス、お酒は大人になつてからだぞ」

僕は大人だから誰憚ることなく飲むけどねグビグビー、と、大人げないエイジ。

おいしい教育者

初講義が「大人つて汚い」かよ、流石だなそこにシビれる憧れる。

「のああ、エイジさんのキャラがわからないつ  
悔しげに酒瓶を床に叩き付けよつとしたのを自分に睨まれて中斷。  
スゴスゴとそれを渡してくるエリスさん超可愛い。  
ちなみに勢いで割つていたら超怒つた。

「エイジ ニハ ナイショダヨ」

部屋の隅にエリスを手招きして、麻薬密売人じみた行動に出る自分。  
でも最近飲みすぎな印象もあるので、ジュースにしておきなさい。  
そう、このサイダーにな・・・。

「わーい、ありがとう酒屋さんー。うまー、シードル・・・げふ  
ふん、このサイダーちょーうまー」  
「リングの発泡酒シードル、英名サイダー。」

うん、その、なんだ、こんなんジュースですよね？（この表記は個人的価値観ですので、飲んで捕まつても責任は取りませぬ）

「おい、同士。エリス酒漬けにしてどうする気だ」  
自分とエリスの頭を両手でそれぞれ鷲掴みにして仁王立ちなエイジさん。

「え、そりや当然、あんなことやこんなことを？」

主に酒の味、二日酔いの辛さ、その先に節度ある飲みかた、とかを学んでくれたらいいかなあ、くらいかな？

ほら、量飲んで痛い目見て、その先に学べるものつてあるじゃない？ 後、個人的には苦味を楽しめるようになつてきたり一人前つて感じはする。

「おおー、メリッさんが珍しく大人に見えるげるふー」

炭酸ゲップを豪快に吐き出すエリスさん・・・もうちょっと、その、上品にですね？

もう痴口リンが子供だからか女捨ててるのかわからなくなつてきてる。

そしてさらに言うなら、自分は常にジェントリーな大人じゃないかなに言つてる？

「ふつうの紳士的な大人はストリーキングなどしない」

半裸の女連れて戻つてきた男、という称号を得た被害者エイジの言葉が重かつた。

正直すまんかった。

でも、肩からタオル下げてたから先端突起隠れてたしセーフだよねセーフ。

あと関係ないけどストリーキングって何の王様なんだろうと思つてた時期があつた。

さらに言うなら女人がやつたらストリーキーンじゃね、とか明後日方向なこと考えてた。

「で、そろそろ真面目にやらないと酒盛りで夜が終わるけど」

ふう、と、ため息をつきヤレヤレだぜつて顔のエイジだが、貴様が一番飲んでるからね今日。

余りに酷いようなら「淨化」でアルコール抜くぞ同士。

「せつかくのほろ酔いが素に返るのも勿体ないなあ。じゃ、そろ

そろ図面引こうかー」

ペチペチと頬を叩いてエイジが気分転換。

んでは、これからは真面目・・・物作る話しまじょうか。

「あ、エリスは部屋帰つて寝なー。んじゃねー」

物作りにさほど興味のない彼女にはこれから時間退屈だらうしね、と追い払い。

ぶーぶー文句言つてきたので、しかたないなあエリ太君はあ、とサイダーを一升瓶で握らせて「ノナさん辺りと飲んでおいでー」と袖の下攻撃。

「うかは ばつぐんだ。

エリスは いすこかへと たちさつた。

メリウは エリスこうがし を おぼえた。

そんなこんなで、野郎一人のむさ苦しに空間に立ち戻つた一室にて。

「では、始めよつか。クラフターのクラフターによるクラフターのためのクラフター会議」

・・・それは、夜が白む頃まで続いた。

そして現れる、それ。

なんと言つ事でしょ、う。

あの荒れ果てた旧貧民町が、見る影もないほどに整地されたシンプルな街並みへと生まれ変わつたではありませんか。

以前は、あばら家の群れといった感の、まさに貧民窟、汚家空間だった場所が、

質実剛健。

どうやつて持つてきたのコレ、という一個數トンクラスの角石の群れを地面に埋め込んで作られた石畳続く道をメインストリートとする理路整然とした計画都市の姿へと大幅なクラスチェンジを果たしましたではありませんか。

メインストリートの両脇に新たに建築された長屋状の住居にも、キラリと光る匠の心配りが。

基本石造りで仕立てられた外側からは想像できない内装が、まさかの木製。

さらに外壁と内壁の間に断熱材代わりの綿花を充填する徹底ぶり。防音機能すら計算に入れた、まさにシンプルイズベストな機能美。その他にも、上、下水道を新たに整備、長屋単位での共有スペースにすることで設置数を少なめに抑えコスト削減にも余念がありません。

更に言つなら、同じ長屋に住むご近所さんに井戸端会議の場所を提供する形にもなる、そつのはなさ。

また、浄水場を町はずれに整備し町の汚れを外に漏らさぬ配慮まで成されています。

そして、いつ襲い来るか分からぬ先日のような災害時に活躍を期待される・・・。

「非常用地下道を作つて各家屋へ入口を設置しました。 出口は町の外の某所になりますが、場所は町の代表者のみへの告知になつて

います悪しからず。外部からの侵入を防ぐため一方通行になつて いますので、賊の侵入は不可能レベルに設定しています」  
具体的には、重量ある下降式入口床と、地下道への滑り台を摩擦係 数極小に仕上げてあります。

エイジと二人胸を張つて、焼け出された人々やノナさんモノさん達 を前に解説を繰り広げる自分。

背後に立てたボードに、エイジが見取り図や全体地図を隨時張り替 えてプレゼンテーションが進み。

「ど、言うわけですが・・・なにかご質問などありましたらどうぞ」  
隠しギミックとかはあまり仕込んでいない分、強度的にはベヒモス が踏んでも数分は耐えられる設計にあります。

主にエイジが目を血走らせて強度計算した拳句に、自分が変身して 実際に踏んでみて確かめたのでもう完璧。

うむ、実に良い仕事が出来た、と、昨日の夜はエイジと二人でく神 話級>備蓄全部開けちゃつたぜ。

「何か、反応薄いね同士メリウ」

エイジがボードを片付けつつ苦笑いする。

あー、地味過ぎたかねー。

しまつたなー。

自分とエイジがそんなやり取りをしている先。

住人たちとの間にエリスがちょこんと踊りでて。

まるで指揮者でも気取るように、両手を振るつて、さん、はい。  
合図。

「「「「「やりすぎー」」」」

・・・皆様に大好評いただけたようで、安心です。

後は実際住んでみてどうか、だけどねえ。

あとは勝手に改造して下さい。

「焼け野原が数日で復興どころか・・・もはや新しい町が出来たと言うべきですね」

エリスと連れ立つてノナさんが新造居住区を探検に行つてしまつたので暇になつたのか、モノさんが満面の笑みでやつてきた。

お、建物系とか実は好きだつたのかな？

「コンセプトは最小剛健、必要最低限をクリアしつつ防御力は折り紙つき、を田指したよ」

モノさんに会釈しながら語るエイジ。

クラフター会議での丁々発止は、無駄ではなかつたのだ・・・つ。

「とまあ、あとは町をぐるっと壁で囲おうかなあ、と思ひながらいいかなー？」

なんか魔物多そうな印象だしね、と自分。

あと一田もあれば、5mクラスの壁は立つかなー。

偉大なりレシピと簡易生産。

連射連射でバカス力建つぜ！

材料さえあればな！

「あ、は、はい。 大丈夫です、と言つか、誰も反対しないと思われます」

反対する理由がありませんしね、と上機嫌なモノさんに、ひとまず自分は言つべきを言つことに。

「で、それ終わったら。自分らは「世界樹」に戻りますんで」見つかってない連中が待つててくれる嬉しいけどなあ、と、思いつつ。

サクッと別れを告げてみる。

モノさんの表情が少し陰り。

小さく息をひとつ吐ぐ。

そして彼は懐から一枚羊皮紙を取り出すと、じかに手渡してきた。

「世界樹」所有権利書。

所有者名は・・・いつもの面子。

「いつぞや呑んだ時に皆さんの集団名はお聞きしましたからね」メリウさん個人に、とするよりそちらのほうが宜しいかと思いまして・・・問題はありませんよね、と。

モノさんは淋しげに笑った。

「ノナ様とも話し合ったのですが、正直なところ皆さんはこの国をお任せしてはどうか、と言つ案もあつたんですよ」もつ受けた恩に報いるのに国自体くらいしか差上げられる物が無いんですよ、と続けるモノさん。

「ですので、メリウさんのが「世界樹」所有の申し出も含めて国丸ごとどうだらう、と話もまとまりかけたのですが」なんというか、Hリスさんとジオさんがその場にやつて来てましてね、と。

聞けばその話し合には、クラフター会議をやつた同じ時間らしく。

「Hリスさんは酒瓶抱えてノナ様を誘いに」ジオさんはたまたま通りがかつたらしく流れでいらっしゃって・・・一人して開口一番

「世界樹だけ下さい」です

その時のことを思い出したのかなんとも面白い顔をするモノさん。

「落とし所はソレで結構ですよ？ と、ジオさんが悪い笑顔で言つてきただので思わず吹いちゃいましたよ」  
「ああ、ジオの顔芸は至高だからねえ。  
あんなん笑う以外の選択しないよ。

「で、エリスさんはエリスさんで「メリッさん、ダメで元々言つだけ言おう、程度で聞いてみたつて言つてたし。ならそれが貰えたからそれで十分以上なんだと思うな」とか格好いいこと言つたかと思つたらノナ様拉致して自室に籠られましたからね・・・そこでもう話し合いも何もなくなりまして」

翌日、一日酔いのノナさんの世話で一日潰れましてね、と、ちょいと恨み言も吐かれつつ。

挨拶と共に一礼し、モノさんは何処かへと去つた。

そして数日後、町を囲む壁も出来上がり。  
自分達は一路世界樹へ。

「じゃ、レースしようか。よーい世界樹へ」

「うわ、同士きたなつ世界樹へ」

「流石の卑怯つぶりですな合体魔法世界樹へ瞬移全究世界樹へ連射

「・・・いいもん、歩いて行くもん」

忘れられて置き去りになつたエリスが一番早く世界樹へ到着して男どもを三九（へへへ）ギヤーするのは、まあ、蛇足。

空とじぶつわせは脳死ひり、ところがオチでしたとや・・・なんで空戦とかするかな貴様等。

急行そ」は秋の空（前書き）

焼き芋なんて何年食べてないだろうー。  
いも天はよく食べるのですがな。

## 急行そこは秋の空

「世界樹前」村から、幾筋もの煙が上がっていた。

空を行く三人・・・自分、エイジ、ジオ・・・に緊張が走る。

ついノリで空中戦に興じてしまい、長時間エリスを愉快放置してしまった。

我に返つて一緒に遊んでいた二人とともに首都付近に戻つてみもしだが、どうやら彼女は「地道に歩く」事を選択したらしく、姿が見えなかつた。

てつくりヤサグれて道端の葉っぱ吸つてラリッてるかと思いきや、うん、感心感心。

・・・と、エリスの成長ぶりを喜ぶのも程ほどに、「世界樹」へ向

け飛ぶ三人組。

空行く彼らが、ようやく見えてきた村の姿に捉えた異変。それが、村のそこそこから空へと昇る、煙の群れだった。多い。

片手では数え足りない本数である。（一進法で数える、とか言われたら数え切れるのだが）

「！」も襲撃受けたのか！？

エイジの緊迫した声の端が、遠ざかっていく。

即座に「飛行」をかけ直し（永久化する時の消耗を抑えるため、普段使いの魔法は威力抑えめが基本）、幾分速度を上げたのだろう。自分もそれに倣い、速度を一回り上げる。

「瞬間移動」しても良かつたが、村人と合体した愉快キメラ誕生などもありうるので自重。なあに、ものの数秒差さ。

「・・・黒・・・たそですけどね・・・」

何かを呟いたジオの声が聞こえた気もしたが。自分たち一人は、我先にとく世界樹前へへ急ぐ。どうか人死に出てませんように！」

焼かれていた。

村人たちや、く世界樹くにいるはずのく魔族くさんたち。彼らが肩を並べて見守る、目の前で。

焚き火が、ぱちぱちと、燃えていた。

その周囲、村人たちの手には、小金色に輝く断面から湯気たなびかせる・・・サツマイモ。

大人も子供も和気藹々と芋を頬張るその光景が、やけにスローモーションに流れて行き。

自分は目前に迫った地面へまっしづら。着地体制を取るのも放棄して叫んでいた。

「焼き芋かああああああああああ・・・」

ふにょん、じろじろじろじろじやああざつざつざつざつー、と。ツツコミ姿勢で地面を転がる自分がいる。

こ、今度はく黒粘体く使つてるから死にはしないんだぜ・・・自分に削られて地面が酷い有様に耕されたけれど。

周囲から、なんだ!? 何か落ちた! と、騒ぎが聞こえてくる。自分は、何事もなかつたように立ち上ると埃を叩く仕草で。

「んん、何かあつたのかね諸君?」

空っぽけてみる事にする。

ジョントリーは慌てない。

超立つるけど。

「いや・・・お前さんが落つこちたから・・・」  
冷静に突つ込んでくるのは、こちらに視線が集まつたのを利用して  
皆の死角に着地して歩いてきたエイジだった。

畜生、空から登場のインパクトで目立つの怖がつてヒヨリやがつた  
な。

若干顔色が白い氣もするけど・・・あ、ゴメン、もつ血の池にはな  
らない予定なので許して下わい。

「ナニナニ、隕石？ って、なんだ。みんな遅かつたね。徒  
歩の私に負けてやんの~ 三九（^ ^ ^）ギヤー」

謎の落下物騒ぎで集まつてきた村人たちを捶い潜つてやつてきたの  
は、棒に刺した焼き芋を左右の手に持つて悪魔神官ごっこしている  
様子のエリスであった。

おお、痴口リンこそ早かつたね、頑張つたえらいぞー。う。  
つてか、自分らどんだけ長いこと空で遊んでたんだよつて話でもあ  
るが。

自分はイイ笑顔で、ワシワシとエリスの頭を撫で付ける。

「ちよ、両手がふさがつてゐるときに頭をなでに来るとかなんとい  
う卑怯者つ

「たまに素直に照れるエリスちん、超かわいい。（挨拶）

末っ子だったから妹とか弟に憧れたんだよなあ、自分。

「あんまりエリスで遊んでやるな・・・でも、よく頑張つたね」

偉いぞーと、自分に続きエイジにも頭を撫でに来られて、エリス狼  
狽。

「ぬ、ぬう、解せぬ。あと一人いたらジョットストリーム撫で撫でされてしまうではないか何だこの素敵空間は・・・せつ! 何者かのスタンダード攻撃の可能性がある!-?」

一息に混乱を口から出すエリス。

不憫な・・・褒められ慣れてないのが特に。エイジと一緒に、流れてもいい涙をぬぐつ。

「今田ぐらには優しく接してあげよう」

保護者「ソンビ」、生暖かい視線でエリスを見るの図。

「こつも優しくすれー! これでも品行方正可憐なレディなんですかね」

「嘘言つな」

「『めんなさい』

エリスさんはいつも正座。

村の中で「魔族」なアーラさん発見。

おひやしう。

つて、あれれ、無表情?

顔忘れられちやつたかなー・・・」「ふう、こきなりハグられるとほつ!?

くじけぬ待ち下わせこく

ようやくアーラさんのベアハッグから解放され一息つく自分。

エイジと、こつの中にやらやつてきて「黒煙でないし平氣では、と言つたでしょ」「なんて呆れ顔のジオを並べて紹介。

おお、お仲間が見つかったようで・・・おめでとう! やれこます、と、

我が事のように喜んでくれるテトラさんに癒されたりもする。

「だがそこのスケブ描き込んでる肅女？ 貴様は正座」

「ふひつ！？」

もはや条件反射的に正座するエリス。

そしてその体勢になつてもまだ絵を描いている根性は評価しよう・

・どうやらテトラさんにベアハツグされた自分が受けらしハハハツ、死ねばいいのに。

「まあまあ、そこいらへんでいつものじゃれ合には片つけるとして。わつさと宿でもとつてのんびりしませんか？」

「いのといひ働きっぱなしでしたし、いい加減骨休みしましよう、と。

首都の工事期間中、一手に怪我人病人御老人の相手をしていたジオの言葉に異論もなく。

・・・何故か、村人及び「世界樹」在住の皆さんを（結果的に）巻き込んでの宴会が、始まつてしまつた。

おいい、のんびりするとか言つてた当人が騒ぎ広げてんじやねえよ・

・・まあいいんだけじと酒とかは飲みきれんほど作つてあるしね。

なんでも、最初は村側に秘密だつた「世界樹」在住者の存在もあつさりとバレてしまつたそうで。

「魔族」の子供が、道に迷つた末に出会つた村の子供と意氣投合して遊び回るようになつたのが交流の始まりらしく。

「ちよいと話してみれば、噂なんてアテにならんというのを実感したわな」という、鍛冶屋の親方の笑顔が好印象だった。

「子供が行方知れずつてことで血相変えてテトラの旦那が村に乗り

込んできてなあ。あの時はそりゃあ大騒ぎだつたんだが」当の子供は、新しく出来た友達の家で芋の皮むき手伝つてんの見つかって、血相変えてた大人どもがお互い顔見合させて大笑いでな、と、きつちりオチもつけてくれた。

「伝聞による差別」があつさりと「実際」に敗北したのは、幸運にもこの村の住人たちが素朴で善良だつたおかげであろうか。ありがたいことである。

とても、有り難い事、である。

結果オーライだけど。

ひとまずは、胸をなでおろす。

飲み、食い、騒ぎ疲れて床に向かう友人知人に手を振つて、自分は一人、月見酒。

ほろ酔い気分も良いもので、量だけはある失敗作の安酒片手に鼻歌交じりの夜を嗜む。

「ああ、酒が美味しいなあ」

悪意のない場所の暖かさを肴に。

自分は「神話級」にも劣らぬ安酒を、きゅつと飲み干した。

さあて。

しばらくのんびりしたら、ガツツリやるとしまじょうか。

いろいろと、ね。

## 再来そこはジャングルで

今朝は深夜の深酒やつた割に、爽快な目覚めで。

村からく世界樹へ周りの散歩途中、思う所あつて木刀取り出し色々訓練をしていたところに、自分同様に木刀かついたエイジが申し合わせたように合流。

「やあ、おはよう」「おはにゅー」と、朝の挨拶だけ交わして、瞬間に鍔迫り合いに移行。

結構ガチで模擬戦をする格好になつた。

・・・同時に一步前へ出たあたり、目と目が合つ瞬間、好き・・・

じゃなくてお互いの興が乗つたのを感じたと言つ事だらうか。

自分とエイジの剣術は同レベル。

身体能力（外の人的な、だが）も大差なく、模擬戦というより型でも演じているような感じになつてしまつた。

お互い本気で打ち込めば木刀程度は当たつた部分はおろか握つた部分からへし折れる。

更に言うなら、打ち込まれれば、人一人くらいは、死ぬかもしぬ。故に模擬戦の様相は、当てずを眞とする寸止め合戦。

ゲームと違い、システム的に同じ攻撃モーションというわけで無しの（やううと思えばやれる辺りが恐ろしい・・・外の人、怖い子ッ）変幻自在な攻防が繰り広げられ。続けること三十分程か。

止め、止められを繰り返し・・・互いが同時に動きも止めた。

「「やりすぎた・・・」」

両名汗だく、昨夜のアルコールも一気に体外に流れでたのでは、という有様で。

さわやかな疲れが体に残るが、流石に凄まじい汗とアルコール臭に

辟易し、洗濯、魔法を使わざるを得なかつた。

その後は競うように村へと駆け戻ると、大人げなく魔法火力で湯を沸かし今ダーリビーン「体洗つてからな?」「はいスマセン」。

一風呂浴びて宿に戻れば、もう朝食時間。

たまには人の作った飯を食べるのもいいもので。

・・・エリスとジオは部屋に引きこもつて出でこないところを見る  
と、酔いつぶれて未だ夢の中、か。

ひとまず村を離れていた間にここを訪れた、仲間は居ないようだ、少し残念。

「じゃ、今日から何しようか?」

堅焼きのパンをスープに浸して食べつつ聞いてきたエイジの言葉に、自分は「世界樹」・・・「塔」の探検を提案し。

エイジと二人、「世界樹」と呼ばれるような有様になつた「塔」を見て回ることとなつた。

流石に訪問二度目な自分は「ああ戻ってきたな」位にしか感慨はなかつたが、エイジはやはり、こみ上げるものもあるらしく。

「うわあ、こんなになつちやつたのか」

入り口近くは「魔族」さん達が整理したのか、ある程度の居住域確保がなされていたが、少し奥まつたエリアは草やら木やらの生い茂るジャングルもじやもじや状態である・・・何この緑の壁。ヤケクソ氣味に、ヤシの木一本玉一つ、等と歌いながら歩いてたら無言でエイジに叩かれた。

最近皆のツッコミが（ゲームしてた時のように）暴行になつてゐる気もするけど、スライムガード（瞬間に突つ込まれる部位のみをス

ライム化。冗談で「部分的‘変身’とか出来ないかなあ」とかやつてたら・・・「デキちゃった?」）を会得した自分に隙はなかつた。生身との境目部分とかスライム部分に溶かされるかとも思つたけどそんなこともなかつたぜ！

なので上半身スライム化して「トゥッシュトゥル～、ゲルメリウ～」とかやつたら、エイジが「シユタゲのトラウマ抉るな」と泣いたのもいい思い出・・・トラウマ多すぎないか同士？

あとどうでもいいけどゲルメリウつてゲルマニウムみたいな語感でカツ「コいい。

ゲルメリウラジオ、セクハラトーク垂れ流す素敵放送。

「結構衝撃映像でしょ？　侍のギルド家屋なんでもひびき寂びの世界だつたよ」

建て直すこととか考えるなら、焼くのはNGだし面倒だなー。

く塔～つて、実は空気の流れとか設計段階以前で考えられているので、延焼とか換気不足で起こる諸症状の心配は低い設計だそうだが・

・・設計者集団素敵つ、何がそこまで彼らを駆り立てた？

そんな思考がスキップしていた自分に、そうかー、とだけ答えて空・

・・といつかく塔～の天井を仰ぎ見るエイジ。

ああ、ちなみにエリスは空中庭園で拾つたんよ～、と、行き倒れ状態の痴口リン拾つた時の詳細を話しつつ。

自分とエイジは、く塔～全ての道を踏破すべく歩き回つた。

道すがら壁や床の強度を確認しつつ進む。

自分が建てた石の家は破壊されたように土台程度しか残つていなかつたのに比べ、こちらは流石く塔～である。

採光、空調窓周辺のヒビなどはこくらか見つかつたものの、根幹構造に歪みなく。

「流石自由な石工同業者組合製・・・推定千年程度じゃなんともな

いぜ！

石と石の隙間に植物の根が侵入できないほど緻密に組上げられた床や壁、天井を讚えつつ。

コソコソ半日かけて歩いたく塔の内部探検、いよいよ空中庭園に到着。

「見る影もない・・・」

空中庭園造園の際、かなり力入れて随所を作っていたエイジが膝をついて絶望した。

く世界樹く内部とはまた格の違ひ緑の壁、壁、壁。

だがエイジ、逆に考えるんだ。

また庭園作成作業できると考えるんだ・・・。

・・・まさか下に入住んでるのに、焼き払う訳にもいくまつて。

だがあえて言わせていただこうか。

傷は深いぞ、ガツカリしろ。

自分は〇〇〇となつているエイジを引っ掻んで立たせ。

「じゃ、ちょっと大きいけれど。盆栽遊び、しようか

拾つたはいいが結局使つたことのない刀身一メートルほどの斬馬刀を懐の袋からズルリズルリと引き出しつつ、エイジの尻を蹴つ飛ばした。

いつまでガツカリしてやがる、さあ喜べ！ 難易度の高い創作活動だぞう！ あとアヒンと泣け！

「あ、貧

「エリスに謝れ！」

ツツコミーつ、胸に当たるとき」「ペタん」。

「板つ」

「「失礼しましたーー」

・・・」今まで、テンプレー。

大雑把に庭園に張り巡らされた道を、木々や草叢から掘り出す作業に興じて、はや数時間。

自分左回り、エイジ右回りで外周から始めたこの作業も、ようやく中心点の元・大樹広場へと至らうとしていた。

こっちに来てから、なんか真っ当に体使って働いてる気がするなあ。実に清々しい。

あと外の人最高。

これが鍛え上げた人間（というには、あまりにも・・・だが）の体かつ。

体を動かした疲労はあれど、さほど後引くものはなかろう、という程度の疲れ方である。

逆説的に、これだけの作業しても筋肉痛一つおきないと云ふことで。

「外の人鍛えるのって、どうしたらいいんだろうなあ

そもそも、育つのか、これ？

朝の訓練では育つた手応えはなかつた。

まだ仮説を立てるのは早いかもしねないが、あえて口にする。

「成長、しないのかな」

だとしたら、ちょっと残念である。

まあ、元々成長しにくいゲームだつたし結論じやなかろう、と楽観し。

自分は道埋める森を、バツサバツサと薙ぎ払うのを再開した。

元、広場中央。

育ちに育つた中央樹の根が蝋足じみて暴れまわったかの様相を呈し。なんというか、まあ酷い。

これ、どうにかなるんだろうか、と、早くも諦めたくなつてきたりもするので、自分は大木に背を向け現実逃避の構え。

ひとまずお先に目的地到着の自分は、休憩準備を整えてみたり。気取つてイスとテーブル用意しようとも一瞬思つたけど、寝転がつたりしたかつたためゴザを地面に敷く。

靴を脱いで座り込むこの快感。

座禅マンここに誕生、その姿勢のままゴロゴロとゴザ範囲を転がりまわつて快楽を堪能する。

ひとしきり転がつて力尽きグッタリしたところで、エイジも緑の壁を切り開いてこちらに合流。

うつぶせに寝転んで微動だにしない自分をサックリ無視して靴を脱ぎ、適当な位置に陣取つたエイジが荷袋から水筒を取り出して一口含む。

「働いた後飲む水の味つて、甘いよね」

もう一口、と、杯を進めるエイジ。

あー、そこらは同意ー。

「自分も飲むかねー・・・うまい」

仰向けに寝がえりをうち、取り出した一升瓶に口を付けて、こう、きゅーっと。

水うめえー。

水うめえー。

「同士、それは酒だ」

どうか、酒かこれ。

道理で変わった味がする水だと思った。

酒うめえー。

アルコール水うめえー。

はあはあはあ、も、もつと飲まねばっ。

依存性はないのよ！ 依存性はないのよ！

「メリウは依存していました・・・つて、鳩ヨメとか懐かしいものを

「

くびくびくびー。

くはあー、労働の後のアルコール含有水分うめえー。

ふへへへ、なんか色々とどうでも良くなつてきただぞうー。

ちょ、ちょつと自分、全裸徘徊してくるであります！

うひよー、盛り上がつてきたあー！

酒、勢い、愉快じやのう、三カチンいただきましたのでー 解き、

放つ！ トキハナーツ（裏声）

「えい、当身」

おつふ。

首筋にエイジの愛刀「閻魔」の峰打ちによる衝撃を受け。

自分はゴトツと、意識を失つた。

案外サクッと意識落ちるんだねえ、なんて暢氣に思つ暇すらありやしない・・・。

抜かれても抜かれても生えてくる舌。

閻魔様に「アナタつて最低のクズだわつ」と罵られながら舌を抜かれ続ける。

しかしながら部位変身スライム舌を駆使した自分に隙はない。

抜かれた端からいじらしく逃げてきて命流してくるスライム舌さん、超可愛い。

「ふへへへ、食べちやいたこへりにカワイイつ、この、見ため縁のナメクジさんめつ？」

そんなところで、夢から覚めた。

消える闇魔様、現れる空中庭園風景。

あれれ、どうした事だーとばかりに現状把握だ、輝け氣配視覚。

・・・上半身起き上がらせた状態の自分と、その背中に膝当てつつ両手で肩を抑えているエイジの図、が、脳裏に描き出された。

どうやらエイジに膝活かけられて意識を戻したらしい・・・自分。

「おあよつ、ヒーし」

ひとまず御挨拶。

おはよう同士、と言つたつもりが、あれれ不思議ね、口が回りず。そして、何か鉄の味ゴクゴク、喉にし最悪。

「おはよつ、同士」  
ナメクジ可愛いとか言つて舌噛み千切りだしたんで慌てて意識蘇生させたんだが平氣かい、と、手ぬぐい差し出してくる。  
舌、噛み千切り？

おかしいなあ、それつて闇魔様の仕業であつて自分の所業じゃないはず・・・ゴホツ、いかん、血が気管につ。

メディック、メディック・・・あ、自分衛生兵でしたゝ回復ゝ・・・やべ、裏表逆にくつつけてしまつたズバアー！白銀癒手ゝムクムクムクー・・・。

「なんで同士はハツチャケるとグロい光景を作るのかな？ かな？」

寝ぼけて舌噛み千切つた奴が目覚めた直後に転がつて舌拾つた拳  
句上下間違えてくつつけた後再び噛み千切つて新しい舌を生やす、  
という光景を見せられたエイジが死んだ日をして首をかしげていた。  
うん、その、ごめん。

状況説明聞いたとしても「何言つてんだお前?」としか思わないわ  
その状況。

自分、即座に五体投地。

「ごめんなさい。」

「ごめんなさい。」

「ごめんなさい。」

三度繰り返すと効果観面。

「・・・まあ、良いけど。 次にグロ光景やつたら、エリス用の倍  
は濃密な説教コースなので心せよ」

「え、死ねつて、こと?」

「次やつたら死ね」

「こやつめ、ハハハ」

「ハハハ。 ・・・嘘と思うな?」

「本当にスマセンでした」

なんだかんだでエイジに謝り倒す羽田となり。  
本日の空中庭園清掃はここまでとなつた。

「世界樹」を出る間際、入り口近くの「魔族」さん達に口元の血痕  
のせいですごい心配かけてしまつたのが心苦しく。  
どなたでも出来るお手軽マジック「洗濯」で、宴会芸でしたー、と  
不謹慎に収めるのもアレなので素直にお心遣いいただく」と。  
ありがとうございました。

・・・おのれ、閻魔大王う!

」の恨み晴らしで置くべきか、と自分は奴に復讐を誓つ「夢にハッ  
当たりするな?」「ゴメンナサイ」。

「でも、なんで黒粘体へかかってたのに歯み千切れたんだろう  
ね?」

「同士の歯に何か永久化された魔法がかつてるんじゃないかな?」  
「そんなまさか、ハハハ・・・あ。 昨日洒落で研磨へかけてた  
かも」

無表情に殴り掛かってきたエイジの、瞬き一つせぬ死んだ目が超怖  
かつた秋の夕暮。

自重つて、そりゃくんに落つこりてないものかなあ、と思つ自分で  
あつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4718w/>

---

異世界っぽいもの（仮）

2011年12月5日19時02分発行